

授業研究ハンドブック

学校における授業研究の質的向上を目指して

平成 26 年 3 月

広島県立教育センター

本ハンドブックは、広島県立教育センターの Web サイトからダウンロードできます。
<http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/jyugyoukenkyuu/handbook.pdf>

はじめに

平成15年に本県教育委員会が「授業改善のための校内研修ハンドブック」を発行して、10年が経ちました。この10年、各学校において授業研究を進めていこうという機運が高まり、現在では県下のほとんどの学校で盛んに授業研究の取組が行われるようになりました。マネジメントサイクル（PDCAサイクル）に基づく授業改善の考え方も、広く使われるようになりました。

しかし、今一度、自分たちの学校の授業研究の在り方を振り返ってみてください。

その授業研究は、本当に学校全体の取組となっていますか？

学校として組織的に行われていますか？

教科の壁はありませんか？

研究協議会がマンネリ化してはいませんか？

取組は年々深く広がりのあるものになっていますか？

授業研究の営みが、教師の力量向上や子供の学力向上につながっていると実感できていますか？

多くの学校が、このような課題に直面しているのではないのでしょうか。

本ハンドブックは、右ページの文献に示されたカリキュラムマネジメントの考え方を参考に、学校における授業研究のPDCAサイクルをよりよく機能させることに焦点を当てて作成しました。大まかに述べれば、年間を通した授業研究のPDCAサイクル（マクロサイクル）と、1単位時間の研究授業のPDCAサイクル（ミクロサイクル）があることを意識することと、カリキュラムマネジメントで重要視されている「**連関**」や「**協働**」といった考え方をキーワードに授業研究を進めていくことに作成のポイントを置いています。

本ハンドブックを活用する上でのポイントは次の4点です。

○学校における授業研究には、1年を単位とした長いスパンのPDCAサイクル（マクロサイクル）と、1単位時間の研究授業に焦点を当てた短いスパンのPDCAサイクル（ミクロサイクル）があります。この二つのサイクルは互いに密接に関係していますが、本ハンドブックでは取り上げた課題がどちらのサイクルにより大きく関連した課題であるかを明確にして示しています。このことにより、授業研究の課題について、どのような取組を行えば効果が期待できるか、考えやすくなっています。

○課題が生じている原因の一つに、PDCAサイクルの「C」（評価）とそれにつながる「A」（改善）がうまく機能していないことが挙げられます。その原因は、「P」（計画）、「D」（実施）が、それぞれ「C」と連関しないまま行われていることにあるのではないかと分析しました。そこで本ハンドブックでは、「P」と「C」、「D」と「C」、そして「C」と「A」を連関させるための考え方や取組の方向性を示すことにしました。

○その際、実際に「よくある課題」やその「改善例」を示し、具体的に理解できるように工夫しました。さらに、巻末では県下の学校で行われている効果的な取組の事例をコラムで紹介し、参考となるようにしています。

○本ハンドブックで紹介している考え方や取組については、図などを用いて分かりやすく表現しました。協働的に授業研究を進めていく際に必要な教職員間の共通理解を図るために、本ハンドブックの一部を増し刷りし、校内研修会等で活用することができます。

本ハンドブックは、学校における授業研究について計画・運営していく立場にある校長先生をトップとしたリーダー層の先生方をはじめ、授業研究に積極的に取り組もうと考えている先生方に対し、何かしらのヒントやアイディアを提供することを目的としています。このハンドブックを手にとった先生方がこれまでの学校の授業研究を見直し、組織的な取組を進め、授業研究を深めてくださることを願っています。

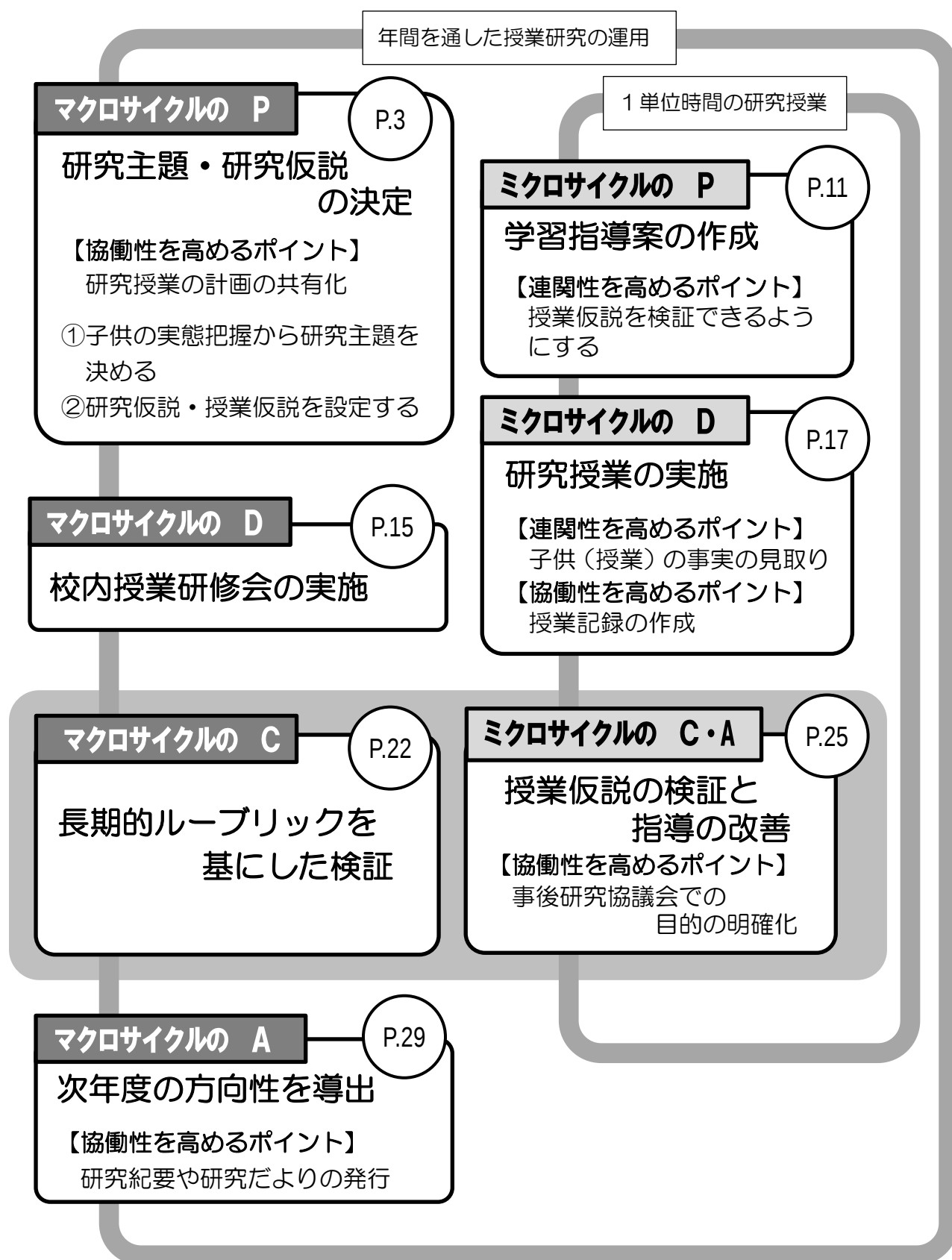
カリキュラムマネジメントに関する参考文献

- ◆中留武昭（2005）
『カリキュラムマネジメントの定着過程—教育課程行政の裁量とかかわって—』
教育開発研究所
- ◆田村知子（2011）
『実践・カリキュラムマネジメント』
ぎょうせい
- ◆村川雅弘・野口徹・田村知子・西留安雄（平成25年）
『「カリマネ」で学校はここまで変わる！ 続・学びを起こす授業改革』
ぎょうせい
- ◆天笠茂（平成25年）
『カリキュラムを基盤とする学校経営』
ぎょうせい

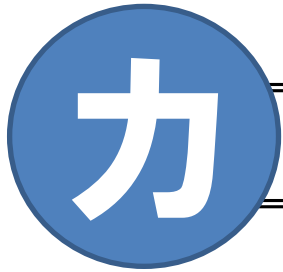


目次

◆カリキュラムマネジメントと授業研究……………P. 1



◆資料・事例編（授業研究の課題と克服のヒント）……………P. 31



カリキュラムマネジメントと授業研究

カリキュラムマネジメントって何？

総合的な学習の時間が導入されて以降、カリキュラムマネジメントの考え方が注目されています。総合的な学習の時間は、各学校が学習内容をつくり、学習方法や評価方法を考え、実施形態を工夫し、改善し続けなければならないものであり、カリキュラム※を「創り、動かし、変えていく」力が各学校に求められているのです。また、この考え方は総合的な学習の時間やキャリア教育や環境教育などの領域だけでなく、各教科のカリキュラムにおいても必要性が増してきました。学校としての独自性や創造性が重要視される中、教育内容や学習方法等を工夫して実施して改善するという、カリキュラムを「創り、動かし、変えていく」ことが求められるようになりました。

カリキュラムマネジメントとは、カリキュラムの「編成」「実施」「評価」「改善」（カリキュラムのPDCA）を中核に据えて、学校教育目標の実現を計画的・組織的に図ることです。その際、カリキュラムをヒト・モノ・財・情報・時間などの経営資源との関連で捉えて改善していくという考え方で

※カリキュラムとは、狭義の教育課程（教育内容を総合的に組織した学校の教育計画）という意味で捉えるのではなく、教育目標、教育内容、教材、教育の展開過程である教授、学習活動、評価の仕方まで、子供に提供される全ての教育的な諸経験・諸活動を含んでいる概念です。

カリキュラムのPDCAと授業研究のPDCAってどんな関係？

カリキュラムのPDCAサイクルを回していく営みとはどのような営みでしょうか。カリキュラムは学校で行われる全ての教育的な諸活動を含んでいます。次ページの図に示すように、カリキュラムのPDCAサイクルは内側に「授業研究のPDCA」を含み、さらに「授業研究のPDCAサイクル（マクロサイクル）」は内側に1単位時間の「研究授業のPDCAサイクル（ミクロサイクル）」を含んでいます。カリキュラムのPDCAサイクルと、授業研究、研究授業のPDCAサイクルは、強く関わり合っていると同時に、授業研究、研究授業のPDCAサイクルはカリキュラムのPDCAサイクルの中心部分を占めていることが分かります。

このことからカリキュラムを「創り、動かし、変えていく」カリキュラムマネジメントの考え方は、カリキュラム全体だけでなく、授業研究、研究授業のPDCAサイクルにも必要だと言えます。

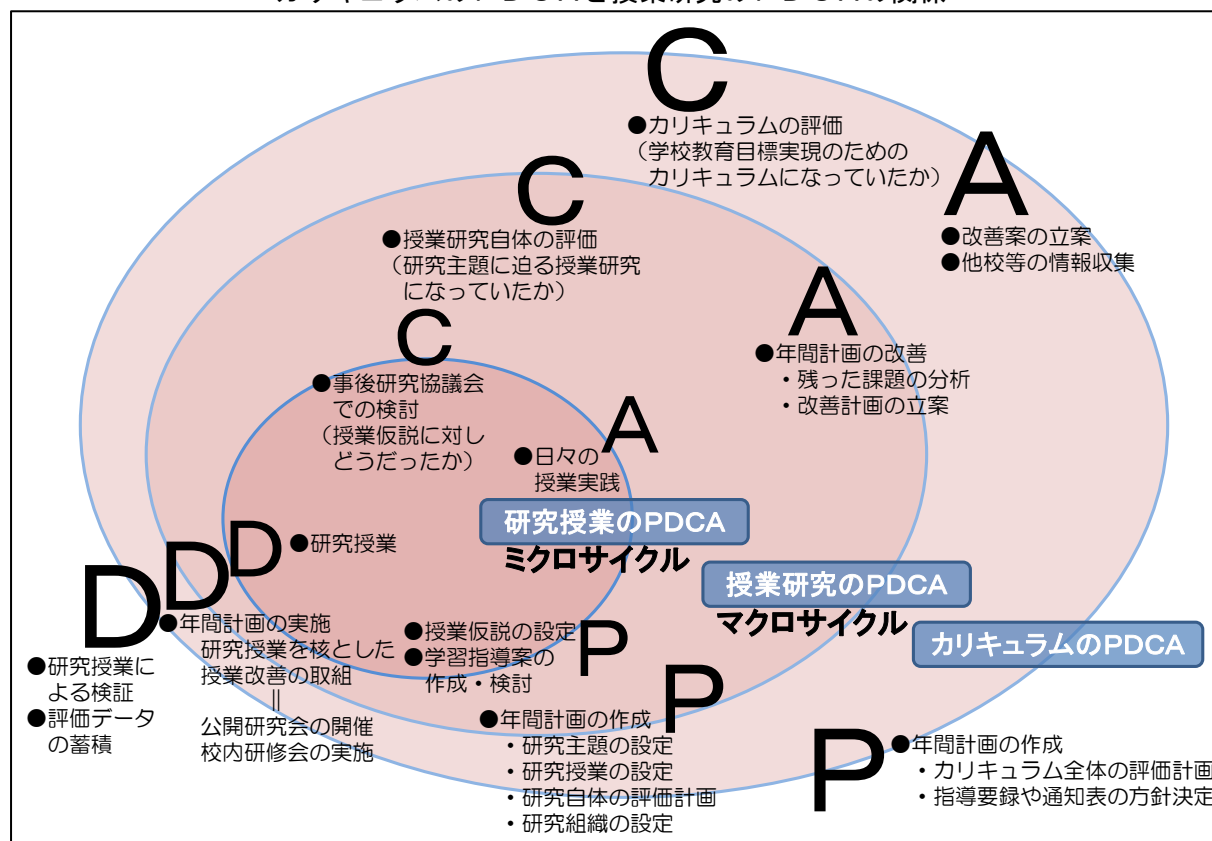
「連関性」と「協働性」ってどんな考え方？

カリキュラムマネジメントでは、「連関性」と「協働性」の二つの考え方が重要視されています。

本ハンドブックでは、カリキュラムのPDCAの一部である「授業研究のPDCA」において「何と何とを連関させることが一番必要か」を絞り込み、授業研究における評価段階と、計画段階、実施段階及び改善段階との連関に着目しました。

評価をいかに機能させるかということは、今、学校における授業研究のもつ大きな課題です。学校でのカリキュラムマネジメントの実践例を著書等で多く紹介している田村知子先生は、評価段階の活

カリキュラムのPDCAと授業研究のPDCAの関係



性化が遅れていることを指摘し、評価段階の課題を改善するために、「マネジメントサイクルはC・Aから始めるのがポイント」と述べています。評価からマネジメントサイクルを始めることによって、評価結果を反映し改善した授業研究の全体計画を作成することなども可能となってきます。

評価から始めることは、評価段階と他の段階との「連関性」を創り出すことであり、評価を機能させる重要なポイントです。

本ハンドブックにおける

連関性＝「C(評価)」段階をP・D・A段階とつなげること

「協働性」について、田村先生は、子供の学びと育ちに関わる各方面での人と人との「協働」が、連関性のあるカリキュラムを創り動かすために不可欠であると述べています。「協働」とは、複数の主体が同じ目的のために力を合わせて活動することであり、教職員一人一人が教科や学年を超えて学校のカリキュラムの理念や意図、目標を理解・納得する(＝共有化する)ことで、「協働性」が生み出されるとも述べています。

学校での授業研究において、教職員みんなで力を合わせて関わり合いながら取組を進めるために重要なことは、「何のためにこの取組を行うのか」について全員が共有すること、つまり同じベクトルをもつことであると考えています。

本ハンドブックにおける

協働性＝目的を全員で共有化して取り組むこと



研究主題・研究仮説の決定

協働性を高めるポイント

授業研究の計画を共有化しましょう。



教師はそれぞれ異なった経験，授業観，教育観をもっています。しかし，研究授業の成果の共有化を図るためには，すべての教師が授業研究の進め方について共通認識をもつことが大切です。また，次のような授業研究の考え方について，学校全体で話し合い，共有化を図ることも有効だと考えます。

【参加型授業研究会の考え方】

○問題解決

- ・研究が，教師の日常の教育実践の中で感じる問題の解決を志向していること。
- ・研究には，未知の事象への挑戦が含まれていること。
- ・研究授業のデザインのの中に，研究的な問いが反映していること。

○協同

- ・あらゆる教師が立場の違いを超えて参加・協力できること。
- ・授業者のみならず，参加するすべての人の成長の機会があること。

○実証性

- ・授業のデザイン，観察，協議のどの段階においても，個々の子供の事実に基づいていること。
- ・互いに捉えた事実が，後から検証可能なように記録されていること。

○改善・成長

- ・実践の改善をめざして，絶えざる省察が行われていること。
- ・教材研究，単元構想，授業デザイン，発問構成において，可能な限りの手立てがとられていること。

○討議

- ・授業者，学習者が，行っていること，なそうとしていることを，共感的に捉えた上で，必要に応じて批判すること。
- ・授業の外側の事実から説明するのではなく，授業の内側の事実から語ること。
- ・授業者への質問は最小限にとどめ，質問者は，回答を予想し，それを合わせて述べること。

(参考 的場正美・柴田好章「授業研究と授業の創造」平成25年)

「良い授業」について考えてみよう

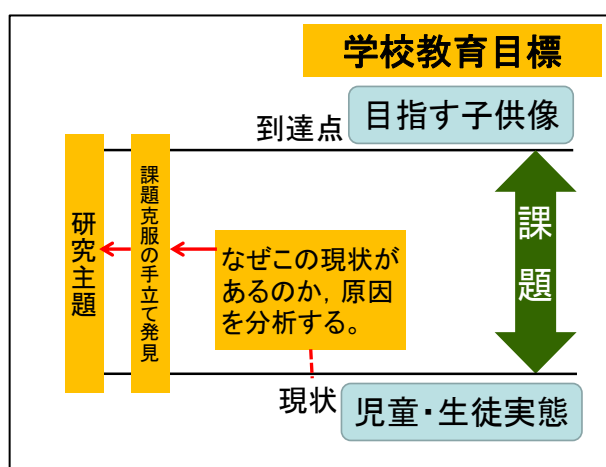
それぞれの教師によって授業観や教育観が異なっています。児童生徒への指導の方法や内容が異なるのもこのことが大いに影響しています。「良い授業」について所属校で話し合ってみましょう。授業研究は学校での共同研究です。教員間の意識の差を埋めていくことが大きな成果につながる鍵といえます。

「良い授業」の例

- ・授業のねらいが達成された授業
- ・生徒が主体的に学ぶ授業
- ・もっと学びたいと子供が感じる授業
- ・見方や考え方を豊かにする授業
- ・知識や価値体系を再構築する授業

①子供の実態把握から研究主題を決める

授業研究の計画は、まず児童生徒の実態把握から始めましょう。学力調査の結果をはじめ様々な方法を用いて子供の実態をリサーチし、そこから課題を見いだしましょう。



学校教育目標を基に、それぞれ学校では「目指す子供像」、つまり子供にとってあるべき到達点を描いています。その到達点に対して今、子供はどんな姿なのかという実態を明らかにすると、そこに「**実態**」と「**目指す子供像**」とのギャップが見えてきます。そのギャップこそ、「**学校の課題**」と言えます。見いだされた学習上の課題をどうやって克服するか、それを考え、実行し、改善していくための取組が授業研究なのです。

大切なのは「**克服する手立て**」をどう考えるかです。「どうして子供はこの現状なのか、何が原因でこうな

っているのか」を分析しましょう。その分析結果から「〇〇の手立てが有効ではないか？」という見通しを立てることができます。**目指す子供像と手立てから研究主題がおのずとはっきりしてくるのです。**

また、子供の実態把握のためには様々な方法があります。実態把握の方法については、複数の把握方法を用いて多面的に子供の実態を把握することが大切です。また、図に示すように、対象を個人、学級、学年、学校全体に変えていくことで、経年変化や学年間の比較を行うことが可能となり、多くの分析ができるようになります。

実態把握の方法

教職員へのアンケート

保護者・学校評議員等へのアンケート

学力調査等の結果

体力テスト等の結果

など

課題の分析の例



教務主任

リサーチした結果から、「学習意欲」に課題があることを裏付けるデータが多く示されたと思う。

どうして学習意欲に課題があるのかについて、原因を分析したり、その背景について先生方みんなに考えてもらったりする必要があるわ。



研究主任

②研究仮説・授業仮説を設定する

研究テーマ（学校の研究主題）が決まったら、その主題から「学校全体の研究仮説」を導き出していきます。学校で授業研究を推進していくためには、研究テーマに対する教職員の理解と「学校全体の研究仮説」を様々なレベルに合わせてより具体的にしていくことが大切です。



例

A 小学校の研究テーマ
「学習意欲を高める学習指導の在り方」



研究テーマから研究仮説を導き出すにはどうすればいいのでしょうか？

研究仮説

「小集団での学びを成立させる学習指導を行えば、児童の学習意欲は高まるであろう。」

研究テーマと研究仮説の設定は、研究を進めるために最も重要な段階です。なぜなら研究仮説の設定によって研究成果が大きく変わっていくからです。また、この段階で研究テーマについての理解を深め認識を高めておくことは、授業研究を推進する上で大きなポイントとなります。

研究テーマへの理解を深める

上の例に示している研究テーマ「学習意欲を高める」ことについては、様々な捉え方があります。個々の捉え方がばらばらのまま、授業研究がスタートしてしまえば、取組もばらばらになり、なかなか成果が上がらないばかりか、検証も曖昧になってしまうでしょう。

では、研究テーマの捉え方について、学校としてどのように方向付けていくとよいのでしょうか。

まずは、各教科等や各学年の立場から、様々な捉え方を出し合ってみましょう。そして、出された捉え方を交流する過程において、先生方に研究テーマと自分の教科等の指導との関わりを考えてもらい、研究テーマについての理解を深めてもらうことが大切です。その際、出された意見と合わせて、書籍や研究論文などの文献をレビューし、先行研究を踏まえて考えることがポイントとなります。



教務主任

「学習意欲」については、〇〇大学の先生が詳しいと聞いたことがあるよ。文献に当たってみよう。

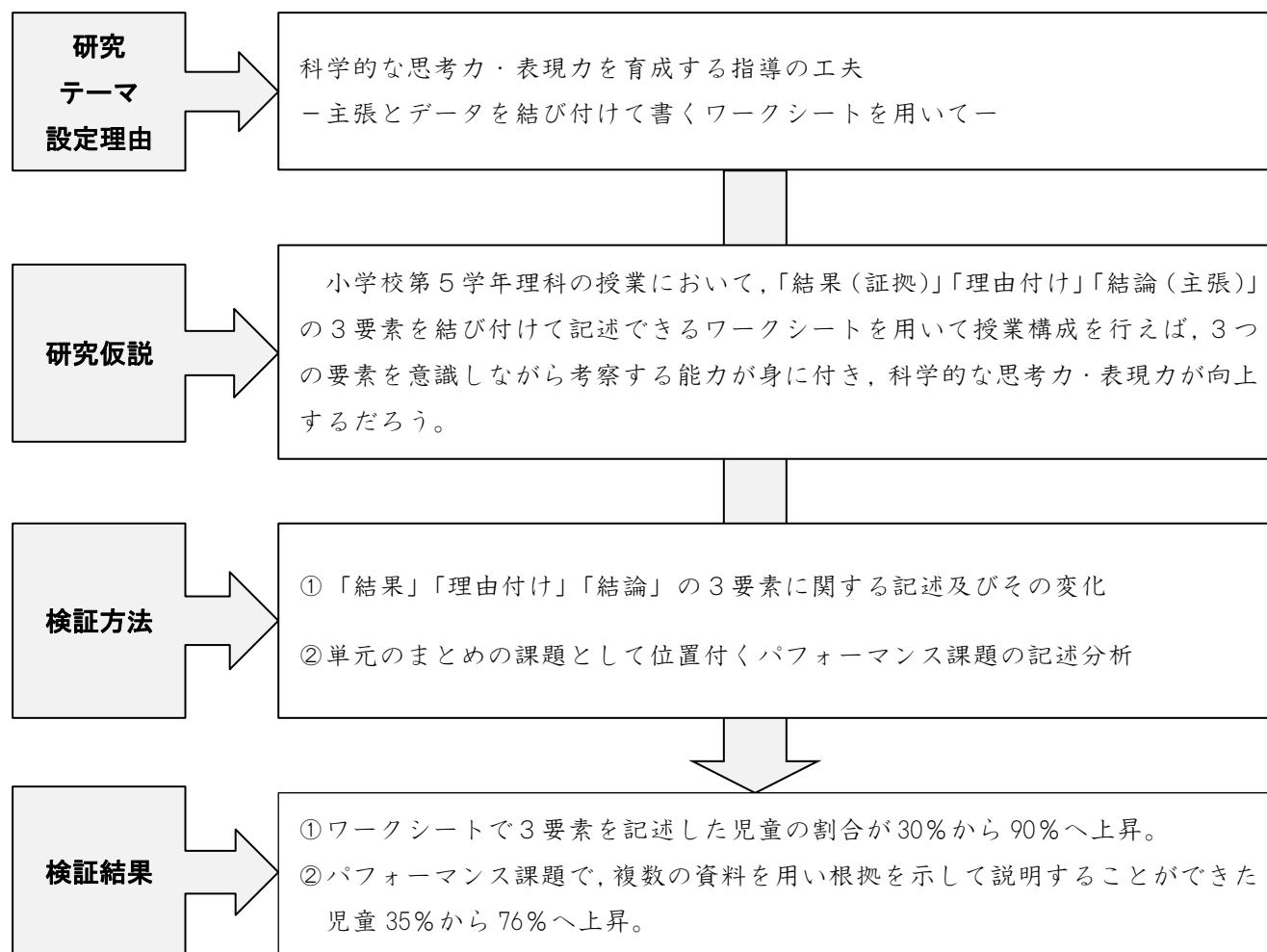
では、次のページの演習をまず、みんなでやってみよう。



研究テーマへの理解を深める演習の例

研究テーマに関連する研究論文の仮説を整理してみよう

氏名（ ○ ○ ○ ○ ）



考え方の根拠としていた研究者

科学的な思考力・表現力 角屋重樹，松浦拓也

ワークシートについて 坂本美紀

パフォーマンス課題 西岡加名恵

組織づくりとの関連

先行研究等をレビューすることによって、研究テーマに対して有効と思われる手立てが明確になってきます。その手立てを組み合わせることによって新しい研究になったり、より効果的な取組になったりします。また、このような文献研究を協働的に行うことで、研究テーマについて共通認識をもつことができ、組織全体で授業研究を進めることにつながります。

研究テーマに関連する研究論文の仮説を整理するシート

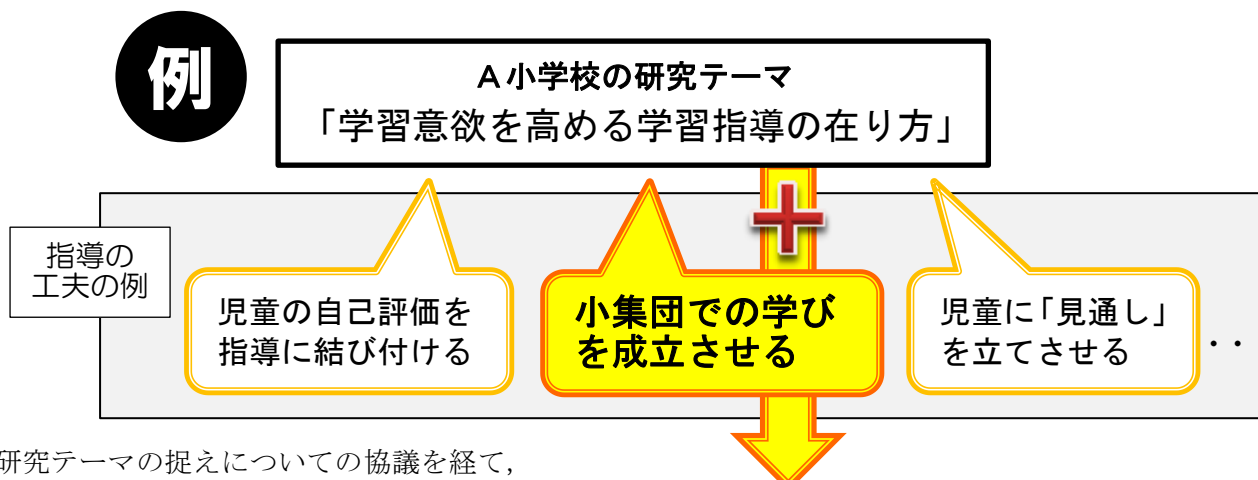
氏名 ()

研究 テーマ 設定理由	
研究仮説	
検証方法	
検証結果	

考え方の根拠としていた研究者

研究仮説を立てる

先行研究を分析するなどして研究テーマへの理解が深まると、テーマの実現のためにどのような指導の工夫をするとよいかについて、考えを進めていくことができます。



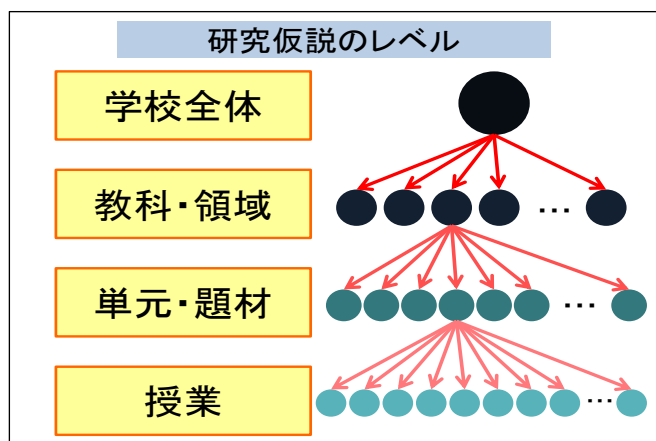
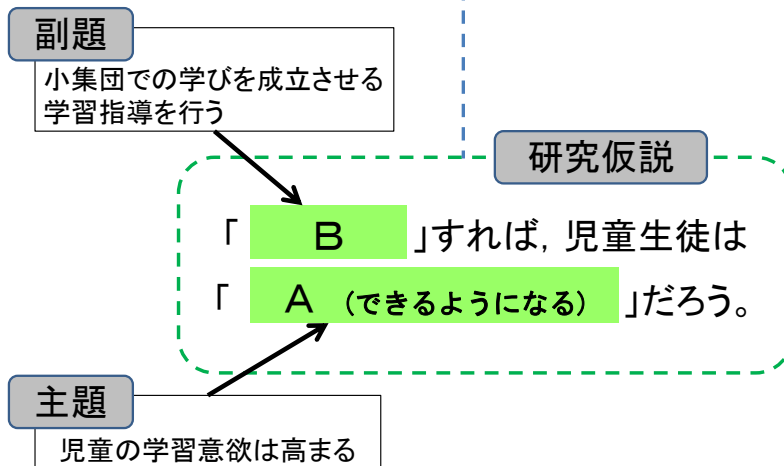
研究テーマの捉えについての協議を経て、研究テーマ実現のため、子供の実態やこれまでの取組を基に、最適と考えられる「指導の工夫」を決定しましょう。「指導の工夫」は「主題（テーマ）」に対応した「副題」とすることができます。「主題（テーマ）」と「副題（指導の工夫）」を組み合わせれば、研究仮説を立てることができます。

研究仮説
「小集団での学びを成立させる学習指導を行えば、児童の学習意欲は高まるであろう。」

研究仮説の構造

「主題」「副題」と研究仮説の関係は、右図のようになっています。

「●●（B）すれば■●（A）できるようになるだろう」という文型の「●●（B）」に「副題（指導の工夫）」を、「■●（A）」に「主題（テーマ）」を当てはめると、研究仮説の形になります。



しかし、この例のように、学校全体としての研究仮説はかなり抽象的になる場合が多いと言えます。

抽象的な学校全体の研究仮説を、教科・領域のレベル、単元・題材のレベル、1単位時間の授業のレベルにまで、少しずつ具体化することがポイントです。

研究仮説を分析し具体化する（授業仮説を設定する）

研究仮説を分析して授業場面に沿ってより具体的にしたもの、本ハンドブックでは、「**授業仮説**」と示すことにします。授業者は、研究授業を行うにあたり、その授業で「**付けたい力**」・「**子供の実態**」・「**指導の工夫**」のつながりをはっきりさせましょう。

右図のように「(B) すれば (A) できるようになるだろう」という研究仮説（授業仮説）の構造は、学校全体・教科や領域、単元や題材・1 単位時間の授業のどのレベルでも同じですが、「A」と「B」に入るものは、レベルによって具体化の度合いが違ってきます。教科や領域、単元や題材のレベルでは、学校全体の研究仮説よりも教科等の特性に応じた具体的な研究仮説になるでしょう。

さらに、1 単位時間の研究授業では、その時間で付けたい力やその時間でポイントとなる指導の工夫が必要になってきます。そのためには、単元における子供の興味や関心、これまでの学習状況や既習事項の定着状況を、多面的・具体的に把握することが必要です。

その上で、なぜそのような現状があるのかを分析します（**児童生徒観**）。そこから見えてくる課題と、この単元で習得させるべき付けたい力（**単元観**）とを照らし合わせ、課題を解決するための具体的で実現可能な指導の工夫（**指導観**）を明らかにしましょう。この三つの観点がはっきりすると、おのずと「**授業仮説**」が明らかになってきます。

（授業仮説をどのように学習指導案に取り入れていくかについては、11ページから詳しく述べていますので参考にしてください。）



次のページでは、「授業仮説」を立てるために「教科の研究仮説」を具体化していく中学校国語科の例を示しています。

B 中学校の例

■学校全体の研究仮説

B: 指導の工夫

「言語活動を充実」

させれば、生徒は、

「主体的に表現する力」

が高まるだろう。

A: 付けたい力

具体化

■国語科の研究仮説

B: 指導の工夫

「自分の考えの根拠を説明する活動」

させれば、生徒は、

「自分の考えをもち、主体的に表現する力」

が高まるだろう。

A: 付けたい力

さらに具体化

■国語の研究授業の授業仮説

B: 指導の工夫

「ワークシートに根拠を吟味する視点を明示」

させれば、生徒は、

「自分の考えの根拠を明確にし表現する力」

が高まるだろう。

A: 付けたい力

「教科の研究仮説」を「授業仮説」に具体化していく中学校国語科の例

★ 付けたい力の具体化

国や県の資料や文献を参考にしましょう。

これまでの授業をみると、生徒は「自分はなぜそう考えたのか」をはっきりさせて表現する力が不十分だと思うわ。だから、この単元では、そこに焦点を当てて授業をやっていきましょう！

自分の考えをもち主体的に表現する力

具体化

自分の考えの根拠を明確にする力

資料を効果的に使って相手に分かりやすく説明する力

考えを整理し提案する力

考えをまとめたり、意見を述べ合ったりして話し合う力

調べたことを基に討論する力

★ 指導の工夫の具体化

自分の考えの根拠を言語化する活動

具体化

導入の工夫

話し合いの工夫

学習形態の工夫

★ ワークシートの工夫

教材の工夫

さらに

具体化

目的意識の明確化
(単元を貫く言語活動と学習過程の可視化)

ホワイトボードを使ったグループ協議で、意見の共通点・相違点を整理

根拠を吟味する視点を明示 ★

I C Tを活用した資料提示
地域に伝わる昔話の教材化

子供の実態に合わせて、どの指導の工夫なら、付けたい力が付くか考えてみましょう。

■国語の研究授業の授業仮説

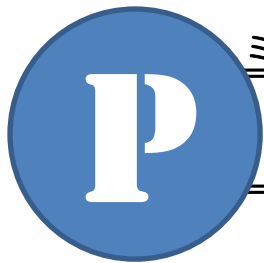
B:指導の工夫

「ワークシートに根拠を吟味する視点を明示」させれば、生徒は、「自分の考えの根拠を明確にし表現する力」が高まるだろう。

A:付けたい力

私の授業イメージに合わせて、より具体化できたわ！

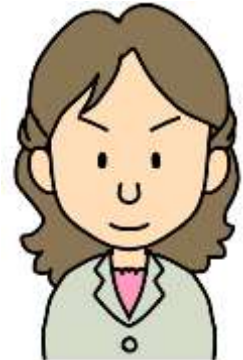
国語担当



学習指導案の作成

マイクロサイクルの「P：計画」は、45分や50分の1単位時間の研究授業について、その学習指導案を作成していくことになります。

このあとの「C：評価」で「授業仮説の検証」を行うわけですから、「P」では授業仮説を検証できるようにしておく必要があります。

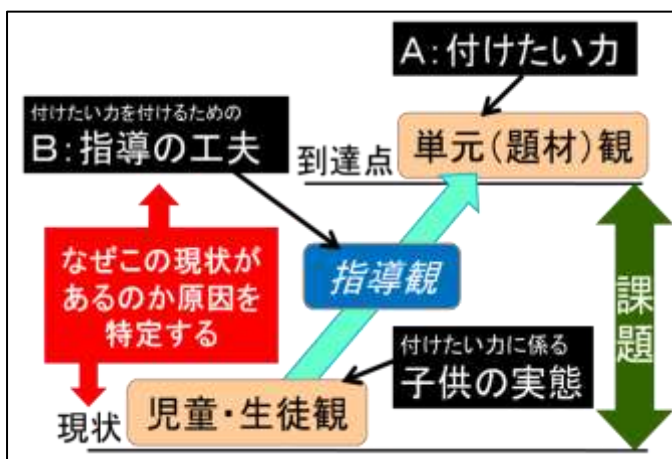


連関性を高めるポイント

授業仮説を検証できるようにしましょう。



「(B) すれば、(A) できるようになるだろう」の型に当てはめれば仮説の形にはできます。しかし、形どおりになっているだけではなく、その授業仮説を検証することができるようにしておく必要があります。そのためには、付けたい力から導き出される「本時の評価規準」を具体的に設定することと、付けたい力と指導の工夫との関係をはっきりさせることがポイントです。



9ページでも述べたように、付けたい力・子供の実態・指導の工夫、の3点がはっきりしていれば、左図のように、学習指導案の「単元（題材）設定の理由」に3点を盛り込み「授業仮説を読み取ることができる学習指導案」をつくることができます。そのような学習指導案であれば、授業仮説の検証も協働的に行うことができるでしょう。

そのために、「付けたい力」を子供達が身に付けることができるように「指導の工夫」を設定しておく必要があります。

授業仮説の改善例：1

C小学校の研究主題：「思考力」を伸ばす教科指導

算数科：小数の割り算

改善前の授業仮説

「計算練習の繰り返しをさせれば、計算の仕方を考える力が付くだろう」

※スキルアップ的な反復練習と思考力とのつながりを、説明できますか？

学校全体の研究主題が「思考力」なので
こんなふうに考えてみたんだけど…

何とか
しよう

こうしてみよう

P. 10

付けたい力を具体化する



この研究授業で付けたい力を
もっと具体化しよう！

計算の仕方を考える力

具体化

評価規準

除法の計算の仕方や、除法の計算のきまり
を基に、計算の仕方を考えている。



指導の工夫の再検討



付けたい力がはっきりしたから、
工夫を考え直しやすくなったぞ。
繰り返し練習では、付け
たい力につながりにくいな。

計算練習の繰り返しをさせる。

変更

図や式に表現したことを基に考え方を
説明させる活動を工夫する。

解説

授業仮説自体の「付けたい力」は元のままですが、
B基準の中で力が具体化されているので十分検証
可能です。

判断基準

- A基準：B基準に加えて、
式の意味を文章や図
で説明している。
- B基準：整数の計算に直
して計算している。
- C基準：整数の計算に直
して計算できない。

解説

具体化した「付けたい力」
を子供が発揮している状態
が「本時の評価規準」＝「お
おむね満足できる状態」と
なります。この例では、既習の
「整数の計算に直して計算
している」という状態が、「お
おむね満足」であるB基準を
満たしていると考えられま
す。

つまり、付けたい力を具体
化することは同時に「本時の
評価規準」を考えることにな
るのです。

ノートの記述から検証可能

改善された授業仮説

図や式に表現したことを基に考え方を説明させる活動を工夫すれば、
計算の仕方を考える力が付くであろう。

授業仮説の改善例：2

D中学校の研究主題：「小集団活動を取り入れた教科指導」

美術科：画家〇〇の作品鑑賞

改善前の授業仮説

「作品から感じたことをペアトークで説明し合えば、
作者の表現の工夫を捉える力が付くだろう」

※小集団での活動と教科で付けたい力とのつながりを、はっきり説明できますか？

学校全体の研究主題が「小集団活動」なのでこんなふうに考えてみたけど...

何だか変よね

こうしてみよう

P. 10

付けたい力を具体化する



この研究授業で付けたい力をもっと授業の指導内容に即して具体的に考えるわ！

作者の表現の工夫を捉える力

具体化

評価規準

形や色彩、構図や構成などの表現から作者の意図を推察している。

判断基準

- A基準：形と色彩の特徴を根拠に、作者の意図を推察して説明している。
- B基準：形と色彩のどちらかの特徴を根拠に、作者の意図を推察して説明している。
- C基準：作者の意図の推察について、根拠が示されていない。

解説

- ① 具体化した「付けたい力」を付けるために
- ② 再検討した指導の工夫を生かす、という視点で考えていきます。

指導の工夫の再検討



ペアトークを行ったとき、子供がどう反応するか想定して考えてみたらどうかしら。

ただの感想だと「言いつばなし」で終わる可能性がある。

変更

ペアで協力しないとできない活動を仕組む方がよい。

具体化

【取り入れる小集団活動】

画家〇〇の作品△△について、ペアのうちの一人が色遣いの特徴を、もう一人が形の表し方の特徴を見付けて、二人で話し合わせる。

よし！

ワークシートの記述から検証可能

改善された授業仮説

作品にみられる表現方法と既習の表現方法の形・色彩を比較し共通点や相違点を見付ける活動を行えば、作者の意図を推察する力が付くであろう。

解説

授業仮説の中に「小集団活動」や「ペアトーク」等の記述はありませんが、教科目標を実現するために行う指導の工夫の本質は変わりません。

学習指導案を作成する～授業仮説の盛り込み方～

検証可能な授業仮説を立てることができましたか？

それではその授業仮説を、学習指導案の「単元（題材）設定の理由」に明記していきましょう。



〇〇科学習指導案

1 学年・学級 第〇学年〇組

2 単元（題材）名

3 単元（題材）について

○単元（題材）観

A: 付けたい力

○児童・生徒観

**付けたい力に係る
子供の実態**

○指導観

B: 指導の工夫

※この欄に「付けたい力」と「指導の工夫」を併せて書く場合も多い。

学習指導要領を踏まえて、この単元の目標や内容に対する考え方を具体的に記述する。

この単元に関する、これまでの既習事項やその定着状況を、前単元までの児童生徒の反応や事前テスト、アンケート結果などを分析し、その状況を具体的に記述する。

この単元における、授業展開や指導方法の工夫、評価の進め方、指導上の留意点などを具体的に記述する。

「授業仮説」を読み取ることができる**学習指導案**を書くことで、「付けたい力」とそれを育てるための「指導の工夫」を授業参観者にも伝えることができます。授業者と授業参観者が、学習指導案から読み取った授業仮説を**共有**した上で、事前協議会・模擬授業などを行うことにより授業の見方が焦点化され、協議が深まります。

授業仮説の共有 ～ある事前協議会で～

① 付けたい力

↓ だけど…

② 付けたい力に関する児童生徒実態

↓ だから！

③ その力を付けるための指導の工夫

●授業仮説

第〇学年〇〇科「」の授業において、

「」すれば、

「児童生徒は、

「」できるようになるだろう。

研究主任

①ワークシートを使って、**学習指導案から授業仮説を読み取り**ましょう。

②「この指導の工夫はこの力を付けるために、有効かどうか」という視点に絞って、全員で考えていきましょう！

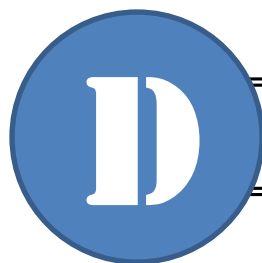
本時のねらいに迫るために、どんな指導の工夫をすればよいか、たくさんアイデアをもらえた！

授業者

授業者がどんな工夫をするのか、みんなで共通理解できたから、**ポイントを絞って授業を見る**ことができるよ。

参観者

学年や教科、校種が違ってても、この視点を共有して授業を見ていけば、**お互いが理解できて協議も深まり**そうだな。



校内授業研修会の実施



さあ、いよいよ実際の研究授業を通しての校内授業研修会です！研究を中心的に推進する先生は、参加者が見通しをもって主体的に参加することができるように、また、スムーズに運営ができるように、事前の準備を工夫しておくことが大切です。研修会が単独で行われるのではなく、前回の研修会や次回の研修会とのつながりを考えて進められるよう、工夫することも大切ですね。

研修会全体の進め方についての工夫

事前に学習指導案とともに「研修の進め方」を配付し、日程や役割分担を明確にしておくことで、先生方が見通しをもつことができ、研修会をスムーズに進行できます。



研究主任

研修の進め方

【研究主題】 児童の思考力・表現力を高める

～思考スキルの定着と思考場面を位置付けた授業構成の工夫を通して～

6 / 21 (金) 理科研究授業 第4学年 指導者 ○○教諭

- 日程
- | | |
|-------------|-------------------|
| 13:40-13:55 | 打ち合わせ |
| 14:00-14:45 | 研究授業 5校時 (第4学年教室) |
| 15:10-16:00 | 研究協議 (図書室) |
| 16:00-16:30 | 指導講話 ○○大学 ○○先生 |

●研究協議の柱

【理科部研究テーマ】 思考を深める教材提示・切り返しの在り方について

- 「関係付ける」という思考スキルは、本時のねらいを達成するのに有効であったか。
○児童の思考を深めるための「教材提示・切り返し」は適切であったか。

●役割分担

①授業記録	写真 (○○) ※デジカメ電池充電 ビデオ (○○) ※ビデオカメラ準備
②児童の記録	Aさんの記録 (○○) Bさんの記録 (○○) Cさんの記録 (○○) Dさんの記録 (○○)
③協議会	<KJ法> 進行 (○○) 記録 (○○) まとめ (○○) ----- <全体協議> 司会 (○○) 板書 (○○) 記録 (○○) 会場設営 (研修部)

事後研究協議会の進め方についての工夫



研究主任

協議会の目的や進め方を事前に共通認識しておくことで、短時間でも充実した協議ができます。

本校では、協議の進行役を輪番制にしています。そのことで、すべての教職員が当事者意識をもつようになり、主体的に研修に参加することができるようです。

事後研究協議会について

【目的】

- ①授業の見方を広げる。
- ②活用型の授業について理解を深め、自分の授業に取り入れられる点を見付ける。

【グルーピング】

	1グループ	2グループ	3グループ	4グループ
進行役	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
メンバー	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇

模造紙にまとめる人や発表者は、グループで決めて下さい。

【協議の進め方】

<授業中>

- 授業観察しながら、付箋紙に気付きを書いておく。
(緑→良い点、黄色→課題)

<協議会>…授業記録・板書の写真を配布

- グループ協議では、評価シートの項目について、模造紙にまとめる。(20分)
 - ・進行役は、付箋をグルーピングして、短冊にキーワードをまとめる。
- 各グループ2分以内で、出た意見を発表してもらい、全体交流する。
 - ・全体司会は、短冊を分類・整理し課題を焦点化する。(5分)
- 課題についての改善策を赤の付箋に各自記入する。(5分)
- 出された改善策を、全体コーディネーターが分類・整理しまとめる。(5分)
- 授業者による授業改善プラン発表。(5分)

協議会のグルーピングは、研修の内容によって変更し、固定化しないようにすることで、いろいろな人と意見交流できるようにしています。

全員発言しましょう！

時間厳守！

■東広島市立寺西小学校・三原市立南小学校の取組を参考に作成

★公開研究会の実施★



公開研究会も研修場面の一つです。また、貴重な外部評価を得るための機会にもなります。研究がひとりよがりなものにならないためにも、授業を通してこれまでの研究の成果を見ていただき、参加者と協働で協議を行うとよいでしょう。そのことで、これまでの取組の成果や課題を顕在化し、次の取組へ生かすことができます。

研究授業の実施

マイクロサイクルの「D：実施」は、45分や50分の1単位時間の研究授業を実際に行うことになります。

「D」では「C」で行う「研究仮説の検証」のための材料として、「授業の事実（教師の働きかけと子供の反応）」を、特に「**子供の事実（子供がどうであったか）**」を明らかにしておく必要があります。

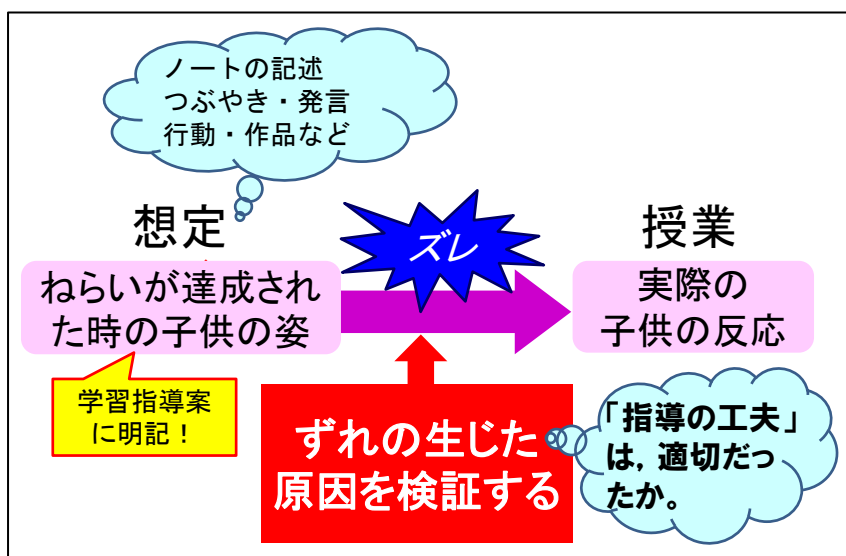


連関性を高めるポイント

子供（授業）の事実を見取りましょう。



そのためには、学習指導案の「本時の展開」に、子供がどのような反応をするかという**想定を明示**しておくことと、子供の実際の反応を**客観的に収集・記録**するという二つのポイントが重要です。



授業を通して、ねらいが達成された時の子供の姿を、ノートの記述、行動として表される姿、発言の内容、作品として表されるものなどで、具体的に想定しておきましょう。その際には、評価規準を更に具体化していくことが求められます。国立教育政策研究所教育課程研究センターの「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（平成23年）が参考になるでしょう。

この想定を学習指導案に明記しておくことで、参観者は「**想定した子供の姿**」を踏まえ、「**実際の子供の反応**」との**ズレ**を見取ることができます。「子供がどこでつまずき、どんなことを学んでいたのか」などを客観的に観察・記録し、事後研究協議会で実際の子供の反応を根拠として議論を展開します。そのことで、授業仮説で示された「指導の工夫（手立て）」が有効であったかについての検証が可能となります。

ポイント1:想定を本時案へ明記

評価規準を基に
子供の具体的な姿を想定する

想定した子供の反応を学習指導案に明記する

【例：中学校第1学年 理科「圧力（浮力）」】

《本時の評価規準》

実験結果から物体の水中にある部分の体積が大きいほど、浮力が大きくなることを見いだしている。



事前に生徒の考察文を想定して、それを基に指導することが、生徒の考察する力を高めることにつながるはずだ。

ここでは、5段階で考察文を想定してみよう。

	学 習 活 動 (◎教師の発問、指示、説明等 ●生徒の予想される反応)	○指導上の留意事項及び ※評価規準（評価方法）
導 入	1 教材の提示 ボーリングの玉を持たせて、水槽に少しずつ沈めさせ、深く沈めば沈むほど軽く感じることを体験させる。 ●水の中に入れると、軽く感じた。 ◎「なぜ水の中に入れると軽く感じるのだろうか？」 ●「水の中では、浮く力がはたらく。」 ●「水の中では、重力と反対向きの力がはたらく。」 ◎「水の中で重力と反対向きにはたらく力を浮力という」（黒板などで図示しながら説明。） ◎「物体をどんどん沈めたとき、物体の重さはどうになりましたか。」 ●「どんどん軽くなりました。」	○砂をつめたペットボトルなどを準備し、ボーリングの玉の代わりを準備して、生徒全員に体験させる。 ○生徒の発言をいかしながら、「浮力」という科学的な用語を説明する。
展 開	8 考察3 【個人思考1】 実験3の結果から、仮説3を検証し、水中にある物体の体積と浮力の関係を見いだす。	
	生徒の考察文の例	
	レベル5	物体の水中にある部分の体積が2倍3倍と変化すると、浮力が2倍3倍と変化する。浮力は、物体の水中にある部分の体積に比例する。
	レベル4	物体の水中にある部分の体積が2倍3倍と変化すると、浮力が2倍3倍と変化する。
	レベル3	物体の水中にある部分の体積が大きいほど、浮力は大きくなる。
	レベル2	フィルムケースの体積を大きくすると、浮力が大きくなる。
	レベル1	フィルムケースの数を増やすと、軽く感じるようになる。

ポイント2:客観的資料の収集

※見取りの方法は授業仮説の内容や子供の実態によって違ってきます。複数の方法を組み合わせて見取ると、より効果的でしょう。

①全体を通して見取る。

②グループを見取る。

③個別に見取る。

④抽出した子供を集中的に見取る。

教卓

①全体を通して見取る方法の例

◆参観者による授業評価票の例

4:よくあてはまる 3:ややあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない

●研究テーマについて

- 1 本時の学習課題は適切であったか。
4 3 2 1
- 2 子供たちは、主人公の気持ちを考えたり、音読を工夫したりしていたか。
4 3 2 1
- 3 子供たちは、ペアで音読を聞いて話し合い、気持ちが伝わるように音読していたか。
4 3 2 1

●全体的な子供の様子について

- 1 子供たちは、授業で何をするのかがよく分かっていたか。
4 3 2 1
- 2 子供たちは、自分の意見を言ったりつぶやいたりしていたか。
4 3 2 1

解説

子供が主語になるように授業評価票の項目を設定することで、必然的に子供の姿（事実）を観察するようになります。しかし、A先生が見た事実と、B先生が見た事実は異なっている場合もあります。全体の印象と個々の事実との関係についてしっかり協議していくことが、検証の場面で大切になってきます。



◆時間軸を追って全体を記録する例

時刻	指導内容	特徴的な児童生徒	
		A	B
	教師の指示内容や支援の様子、全体の児童生徒の様子等を記入しましょう。	発言内容・表情・動作などを具体的に記録しましょう。	

② グループを見取る方法の例

◆グループごとの見取りシートを使って記録する例

担当()班		班員の関わり
A	B	
C	D	
E	F	

参観者で班ごとに分担を決めて、個人の様子を記録しましょう。
その際に、班員同士の関わりも記録しておきましょう。

③ 個別に見取る方法の例

◆座席表を利用して記録する例

長さ $\frac{2}{5}$ mのリボンを3人で分けると、1人分は何mですか。

A 式だけ書いている。	B $2/5 = 2 \div 5 = 2.5$	C 分からん。
D $2/5 = 6/15$ で3つに分けると、 $2/15$	E 記述なし。	F $3 \div 2$ が割り切れなくて悩んでいる。
G ワークシートの記述からの見取り	H 行動観察からの見取り	I

つぶやき・発言からの見取り

④ 抽出した子供を集中的に見取る方法の例

<記入例>

観察場面	予想される子供の反応	教師の関わり	具体的な子供の姿	観察者の所見
要点を読み取る場面	挙手しないだろう	・意図的指名 ・繰り返し確認	・生き生きと挙手 ・嬉しそうに前に出て発表する。	・すかさず指名したことが、意欲を持続させた。 ・問いの再確認によって、自信をもって答えを見付けることができていた。

子供の反応の予想と
教師の関わりを記入

観察者が見た
子供の事実を記入

子供の事実から観察者が
解釈したことを記入

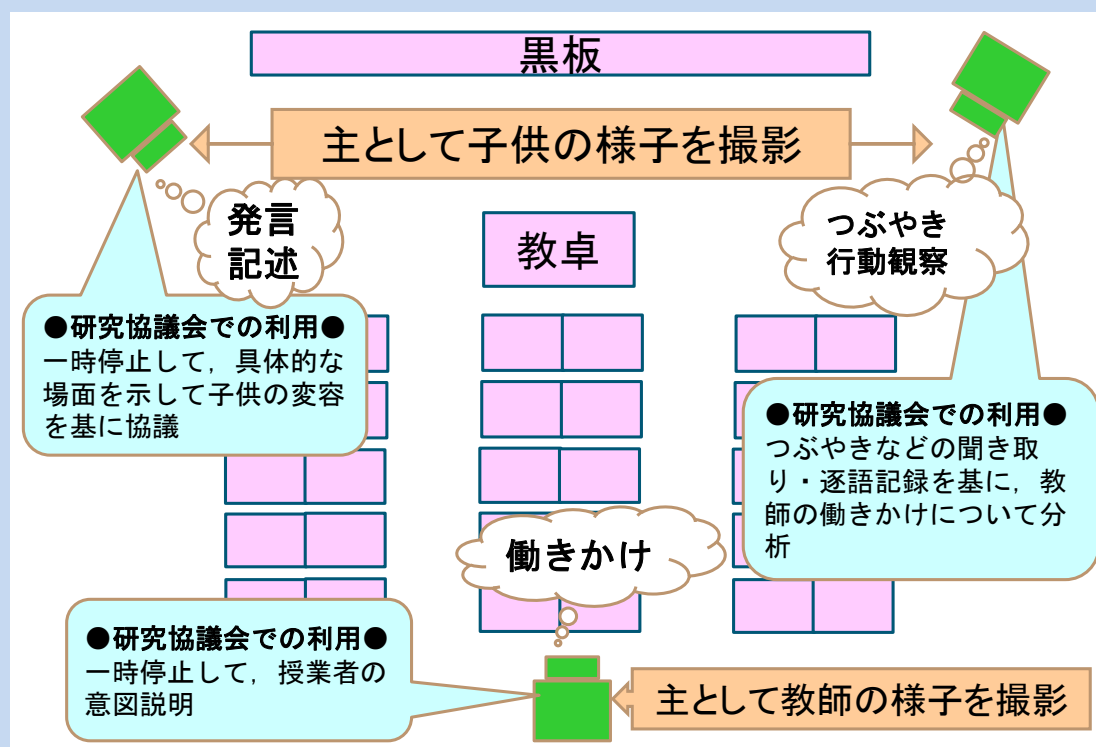
解説

重点的な指導の場面に特化して記録し、子供のどのような言動からどのように解釈したのかを協議会で話せるよう、準備するわけです。子供を多面的に見るために、一人の子供を複数の教師で観察する方法も考えられますよ。



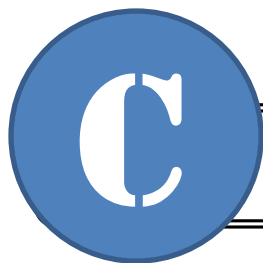
◆ビデオ・音声記録の活用◆

映像や音声は、授業を分析する上で有効なツールです。研究部のメンバーなどで重要な場面を編集すれば、授業の実施日から何日か経過した後に深く協議することも可能です。



【参考】

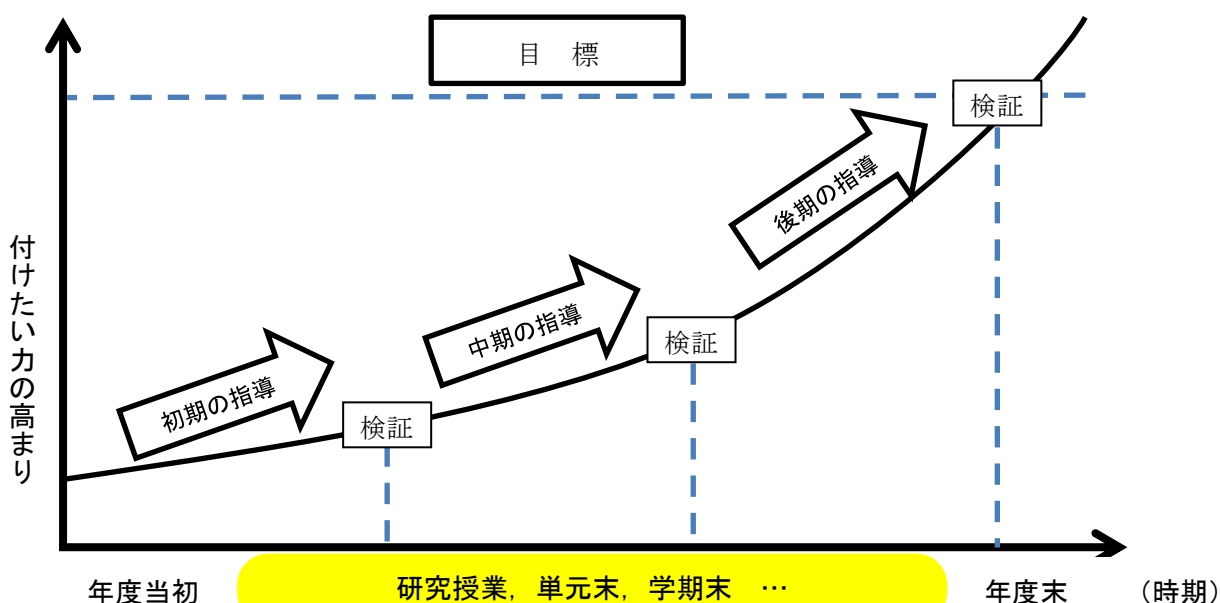
- 広島市教育センター（平成17年）「授業研究ハンドブック」、広島市教育センター（平成18年）「授業研究ハンドブックⅡ」
- 香川県教育センター（平成22年）「『子どもの視点』を生かした授業改善」



マクロサイクル

長期的ループリックを基にした検証

研究仮説で設定した付けたい力は、次の図のように、1年間を見通して段階的に指導していく必要があります。よって、指導の段階ごとに子供の達成状況を評価し、その段階ごとに今行っている指導が有効かどうか検証していくことで次の指導につなげることができます。



1年間を通して、指導の段階ごとに子供の達成状況を評価する方法として、ここでは、**長期的ループリック**を紹介します。

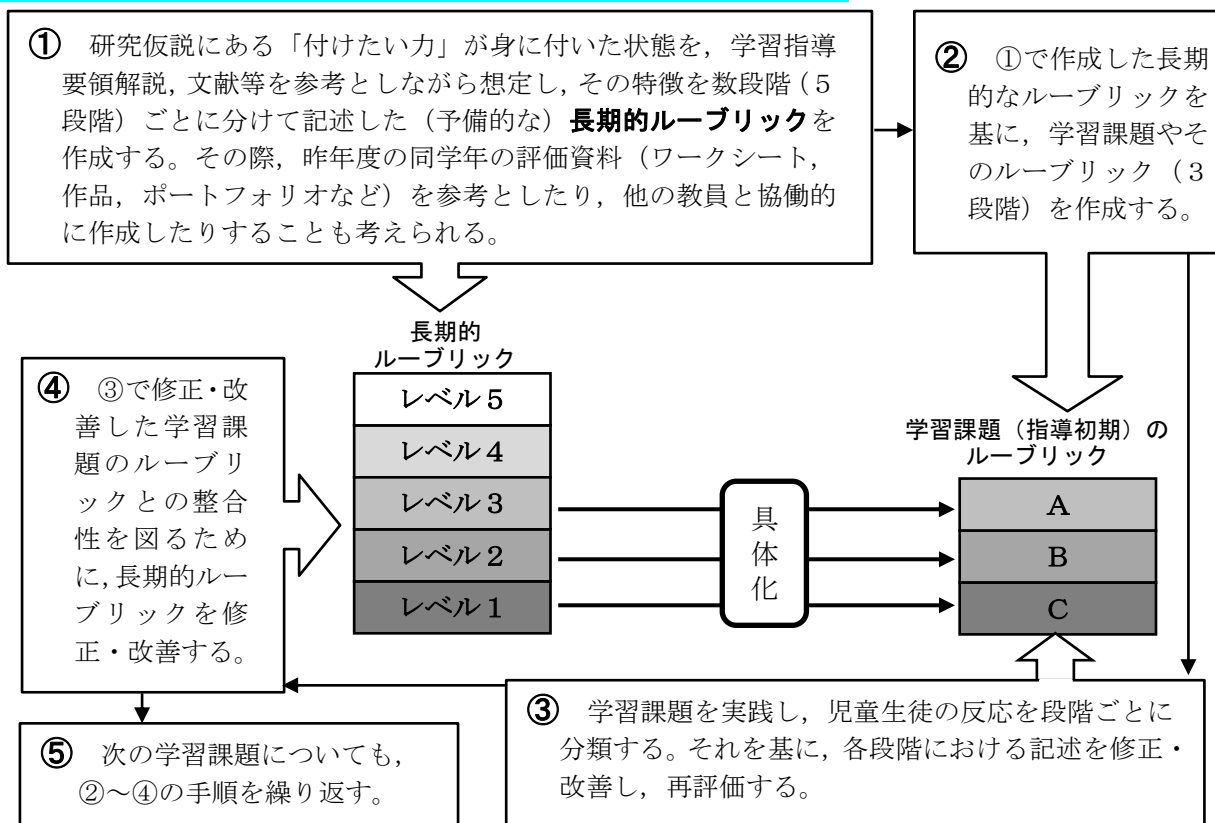
単元を超えて繰り返し、付けたい力に関する課題を取り上げ、一貫して**長期的ループリック**を用いて評価することで、児童生徒の付けたい力の高まりを捉えることができます。



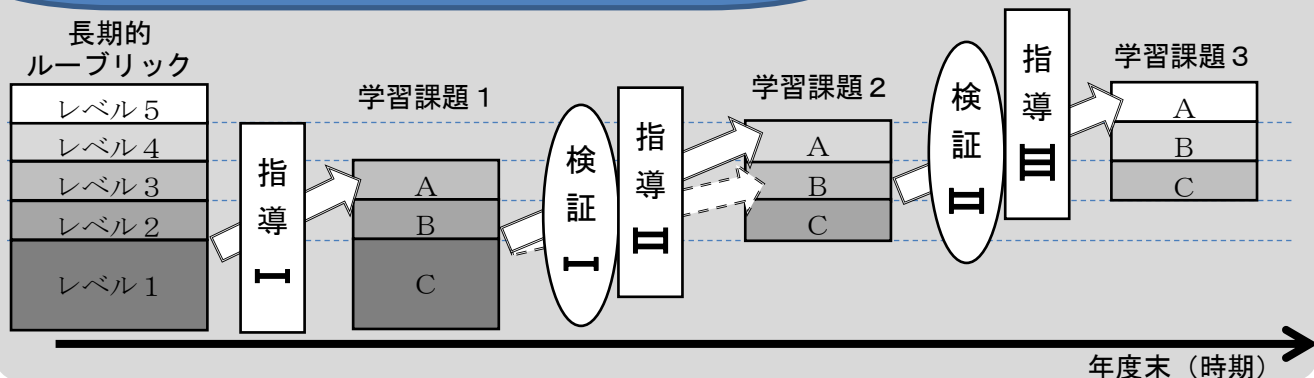
長期的ループリックとは

学習課題の種類や単元を超えて、ある力の育成状況を捉えるための評価基準（評価指標）のことを、長期的ループリックといいます。この長期的ループリックは、次のように、児童生徒の反応を見取る中で改善していくことが大切です。よって、研究授業の検証の際に、指導の改善とともに評価の改善も同時に行うことが必要となります。

《長期的ループリック作成と修正・改善の方法の例》



長期的ループリックを基にした指導の改善の例



① 長期的ループリックのレベル2・3をねらいとした指導を行います。

指導 I

② 学習課題1のループリックを用いて、児童生徒の状況を把握します。

検証 I

③ 検証 I の結果を踏まえ指導します。

指導 II

- 児童生徒がおおむねA、Bの段階である場合

《例》

A	B	C
12人	20人	3人

長期的ループリックのレベル3・4をねらいとした指導に進みます。Cの段階の児童生徒に対しては個別指導を行います。

- Cの段階の児童生徒が多数いる場合

《例》

A	B	C
2人	8人	25人

長期的ループリックのレベル2・3をねらいとした指導を継続します（Cの段階の児童生徒の状況を分析（誤答分析等）し、指導方法を工夫・改善する）。状況を見ながら次の段階に進みます。

：

長期的ルーブリックの作成例

《研究仮説 小学校理科》

「自分の考えを表現させ、それをグループ内で修正・改善させれば、科学的な思考力・表現力は育成できるだろう。」

文献等による付けたい力に関する考察

○国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成 23 年）

「**評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校）**」

第 3 学年 評価の観点の趣旨

科学的な思考・表現

「自然の事物・現象を比較しながら問題を見だし、差異点や共通点について考察し表現して，問題を解決している。」

○文部科学省（平成 20 年）「**小学校学習指導要領解説理科編**」

「第 3 学年の目標は、自然の事物・現象を差異点や共通点という視点から比較しながら調べ，問題を見だし、見だした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、物の性質やその働きについての見方や考え方，自然の事物・現象に見られる共通性や相互のかかわり，関係などについての見方や考え方を養うことである。」

《小学校第 3 学年における科学的な思考力・表現力》

文献等を参考に「自然の事物・現象を差異点や共通点という視点から考察する力」と定義

《長期的ルーブリック 小学校第 3 学年 理科》

レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	レベル 5
観察，実験の結果について，そのデータを記入できていない。 比較する視点について理解できていない。	《表，図》 観察，実験の結果について，与えられた表や図に整理したり，表現したりすることができている。	《表，図》 観察，実験の結果について，比較する視点を与えることで，表に分類したり，図で表現したりし，それを基に差異点や共通点に気付いている。	《表，図》 観察，実験の結果について，比較する視点を与えることで，表に分類したり，図で表現したりし，それを基に差異点や共通点に気付く，一般化した結論を導き出している。	観察，実験の結果について，適切な手段（表やグラフなど）を自ら選択して整理し，それを基に差異点や共通点（グラフの特徴）に気付く，一般化した結論（規則性）を導き出している。
	《グラフ》 観察，実験の結果について，与えられたグラフに値を当てはめている。	《グラフ》 観察，実験の結果について，与えられたグラフに値を当てはめ，その特徴に気付いている。	《グラフ》 観察，実験の結果について，与えられたグラフに値を当てはめ，その特徴に気付く，規則性を導き出している。	

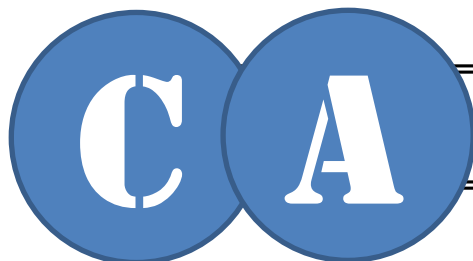
上の理科の長期的ルーブリックでは，下の解説の図のように高いレベルになれば，限定された状況で力を発揮している状態から，より主体性をもって力を発揮している状態になると想定して作成しました。これは長期的ルーブリック作成の，考え方の一例です。

解説

【長期的ルーブリック作成の考え方の例（5段階の場合）】

レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	レベル 5
教師が考えるための手段や方法を与えたり，限定したりした状況で，育成したい力を発揮させる。				レベル 4 までに身に付けたことを基に，学習課題に応じて適切な手段や方法を選択し，自力解決している状態を見取る。
主体性の高まり				
育成したい力の高まり				





授業仮説の検証と指導の改善

協働性を高めるポイント

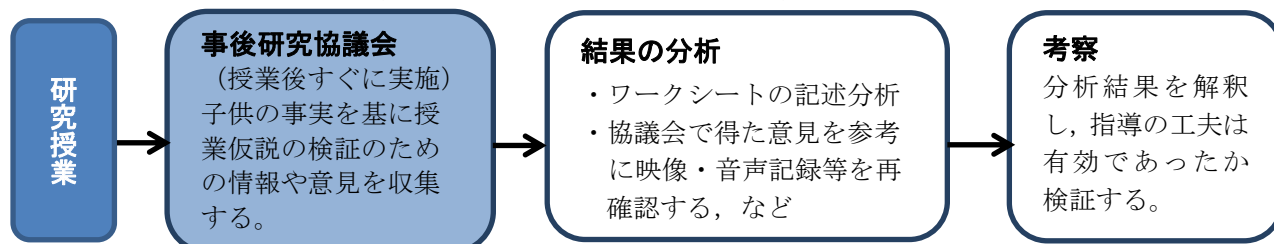
事後研究協議会の目的を明確化しましょう。

事後研究協議会の目的を明確にしていますか。
次のように目的を明確化することで、参加者全員が、
共通の目的意識をもって協議会に取り組むことがで
き、授業者にとっても役立つものとなります。



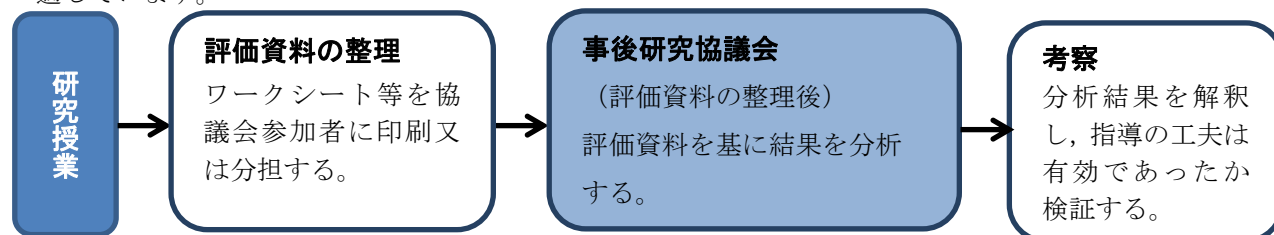
《パターン１：協議会の目的を、子供の事実を基に授業仮説の検証のための情報や意見を収集することとした場合》

・よく行われるこのパターンは、授業者が協議会后に結果の分析、考察を行うことが必要です。



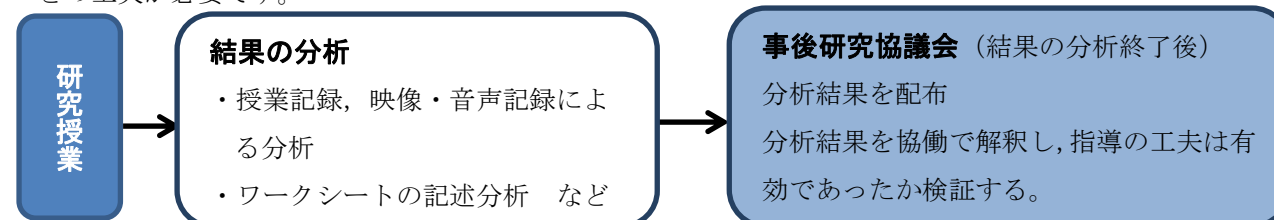
《パターン２：協議会の目的を、結果の分析を行うこととした場合》

・このパターンは、全員のワークシートの記述等から、授業のねらいの達成の程度を協議することができます。事前に想定しておいた子供の反応や評価規準（判断基準）の妥当性などを検討することにも適しています。



《パターン３：協議会の目的を、分析結果を考察することとした場合》

・このパターンは、分析結果の解釈を協働で行うことで、多面的に授業仮説を検証することができます。ただし、研究授業から時間が経過していますので、授業記録、映像記録等を確認しながら協議するなどの工夫が必要です。



マクロサイクルで説明した「1年間を見通した研究仮説の検証」を意識して研究授業の検証を行いましょう。付けたい力や指導の工夫を見直し、今後の指導の改善につなげることが必要です。検証の事例を見ていきましょう。



研究授業の検証例（P. 24の小学校理科の例の続き）

この授業仮説を検証してくんだね。



【研究仮説】

「自分の考えを表現させ、それをグループ内で修正・改善させれば、科学的な思考力・表現力は育成できるだろう。」

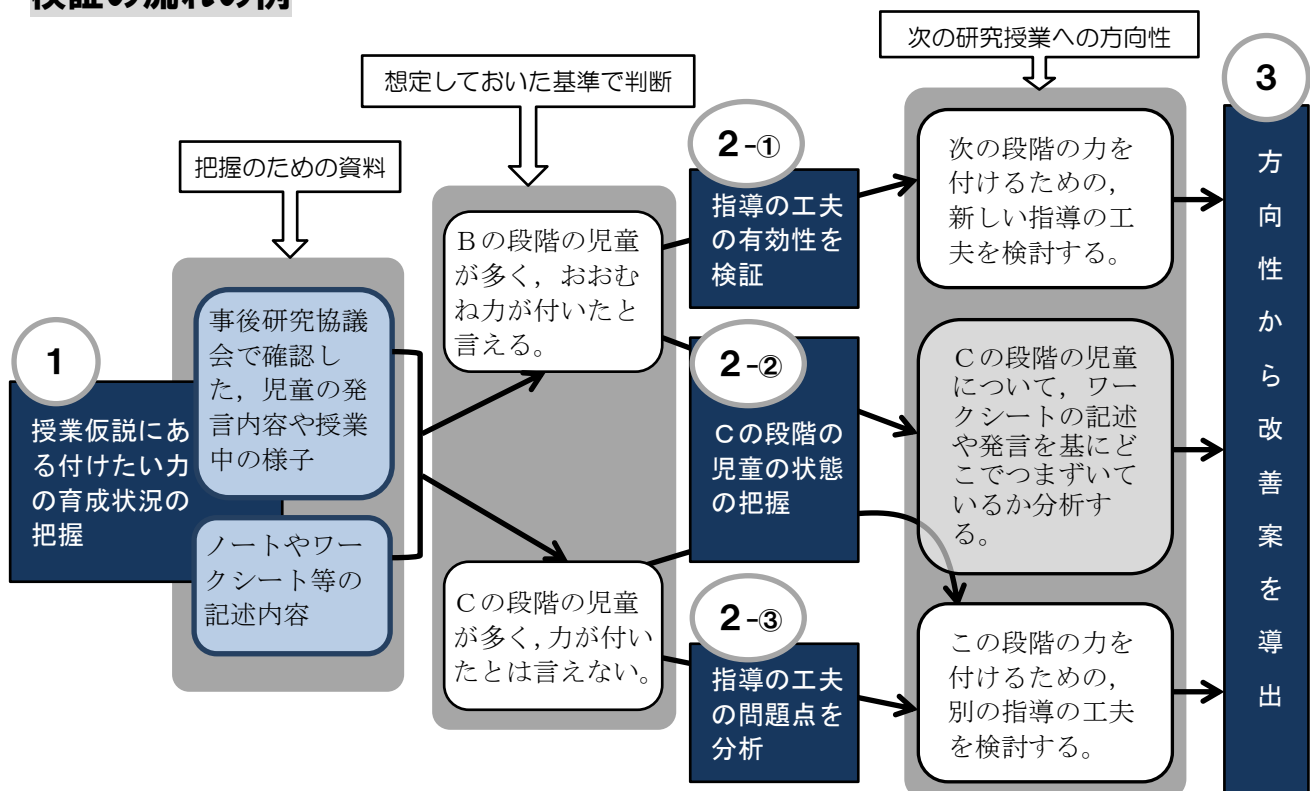
【授業仮説】

「実験の結果を整理した表をグループ内で比較させながら、自分の考察文を修正・改善させれば、自然の事物・現象を差異点や共通点という視点から考察する力が高まるだろう。」

この授業の評価の基準

Aの段階	Bの段階	Cの段階
観察、実験の結果について、比較する視点を与えることで、表に分類したり、図で表現したりし、それを基に差異点や共通点に気づき、一般化した結論を導き出している。	観察、実験の結果について、比較する視点を与えることで、表に分類したり、図で表現したりし、それを基に差異点や共通点に気付いている。	観察、実験の結果について、与えられた表や図に整理したり、表現したりすることができる。

検証の流れの例



1-① 授業仮説にある付けたい力の育成状況の把握

この授業の評価規準（これを満たしていればおおむね満足：B）が、学習課題のルーブリックのBの段階となります。この事例では「観察、実験の結果について、比較する視点を与えることで、表に分類したり、図で表現したりし、それを基に差異点や共通点に気付いている。」がBの段階（B基準）です。この基準を用いて、児童のワークシートの記述を評価しました。

（検証の例）

A	B	C
8人	25人	2人

この「検証の例」では、この授業で付けたい力についてはおおむね目標を達成していることが分かります。ただし、「十分に満足：A」の人数は決して多くない状況があります。

2-① 指導の工夫の有効性を検証

この事例では、授業仮説における指導の工夫が「実験の結果を整理した表をグループ内で比較、検討させる」ことなので、児童が最初に書いた考察文がグループ活動によってどのように修正・改善されたかを、ワークシートの記述の変容から見取ることが必要となります。

※ 後で見取ることができるように、自分の意見を消さないことや追加・修正は赤ペンや他の枠に書くことを事前に指導しておく必要があります。

（検証の例）

		グループ活動後			計（人）
		C	B	A	
グループ活動前	C	2	12	0	14
	B	0	13	4	17
	A	0	0	4	4
計（人）		2	25	8	35

この事例では、グループ活動後に2人の児童がCの段階からBの段階に変容し、4人の児童がBの段階からAの段階に変容しています。その結果、1-①のようにおおむね目標を達成できたことが分かります。それは、「実験の結果を整理した表をグループ内で比較、検討させる」という指導の工夫が、有効だったからと考えられます。

2-② Cの段階の児童の状態の把握

Cの段階の児童のワークシートの記述や発言を基に、どこでつまづいているか分析します。

3-① 改善案の導出

今後の指導の方向性と改善案（おおむね達成している場合）

検証の結果から、付けたい力も指導の工夫もおおむね妥当で、成果が上がっていると判断できた。この「実験の結果を整理した表をグループ内で比較、検討させる」ことについては、継続して行う。ただし今後は、一般化した結論まで導き出せるように、学習問題は何か、全体の結果から何が言えるかなど、言葉かけを合わせて行う。また、Cの段階の児童には、つまづいた箇所の分析を基に個別指導を行っていく。

1-2 授業仮説にある付けたい力の育成状況の把握

前ページの例とは逆に、グループ活動後、あまり考察文に変化がない状態も考えられます。
(検証の例)

A	B	C
2人	18人	15人

この「検証の例」では、この授業で付けたい力について目標を達成したとは言えません。

2-3 指導の工夫の問題点を分析

1班の様子	2班の様子	3班の様子	...
・発言が、実験の結果の確認に留まっている。	・予想と合っていた、いないという発言が中心となっている。	・発言が、実験の結果の確認に留まっている。	...

何がよくなかったのか、映像記録などで、グループ内での発言を確認してみよう。



Cの段階の児童が多い班では、「結果の確認」や「予想と結果との比較」に留まり、実験の結果から分かることを話し合っていなかった。つまり、考察の際に何をすればよいのかを理解せずにグループ活動を行っていることが考えられる。授業の始めに学習問題を「～を調べよう！」と提示していたが、そのため、結果を確認や予想と比較すれば調べたことになると思わせてしまったことが原因と考えられる。

3-2 改善案の導出

今後の指導の方向性と改善案 (達成が不十分の場合)

この段階のポイントは、考察の際に実験の結果の差異点や共通点に気付かせることだったが、不十分だった。今後も差異点や共通点を児童が自分で見いだせるような指導を中心に行うこととする。

具体的には、考察の目的について理解が十分でないことに課題があった。その解決のため、学習問題を疑問形にして、考察はその答えを見いだしていくことを明確に示し、考察では何をするのかということをはっきりとさせる。その上で、実験の結果(表)のどこに着目して比較すればよいかを確認してからグループ活動に入らせるなど、丁寧な指導の工夫を行っていく。

解説

「ミクロサイクルのC、A」で検証し改善する授業仮説は、「付けたい力」と「指導の工夫」から成り立っています。個々の研究授業が「点」となってしまわないようにしながら、この「付けたい力」や「指導の工夫」を常に見直し、改善していくことが「C、A」を機能させることだと言えます。

ミクロサイクルのC、Aで大切なのは、どのようなやり方であっても、何がどこまでできたかを明らかにし、次にどうしたらよいかを具体的な形にすることです。さまざまなやり方が考えられますが、今回示したやり方を一つの例として参考にしてみてください。

また、具体的な形にする例として、「授業改善レポート」の作成を紹介します。事後研究協議会を受け、授業者が研究授業の課題を明確にし改善策を整理し文章化するという取組です。レポートは参観者にも配付され共有化されます。授業者にとっ

授業改善レポート

〇〇 〇〇

- 1 授業日
平成〇年〇月〇日
- 2 単元名
第〇学年 〇〇科「〇〇〇〇〇〇」
- 3 課題
(1)
(2)
- 4 改善策
(1)
(2)

■三原市立南小学校の取組を参考に作成

A

次年度の方向性を導出

協働性を高めるポイント

研究紀要や研究だよりを発行しましょう。



授業研究をさらに進めるためには研究の進捗状況と今後の取組の方向性や取組内容を職員で共有化していくことが大切です。そのツールとして有効なのが「研究だより」と「研究紀要」です。また、研究紀要は研究の成果を発表し、その成果を広く発信する機会にもなります。形式を整えてチャレンジしてみましょう。

授業研究に関わる情報を積極的に発信しよう

「研究だより」の発行

現在、多くの学校では「研究だより」が発行されています。「研究だより」とは校内又は共同して研究を行っている学校の間で発行されているものであり、授業研究のテーマやその根拠となる考え方、学力調査等の結果やその分析内容、研修会の成果と課題を明確にしていくために作成します。また、授業研究に関わる取組の共有化等にも活用できます。しかし、配付するだけでは十分とは言えません。研究だよりにより意味をもたせ、読んでもらう工夫が必要となります。

もともと研修内容をまとめていくことは多くの情報から必要な情報を取り出し、意味付けていくものです。まずは研修会ごとの成果と課題を発信してみましょう。

研究だよりの項目例

研究主題と設定理由
 学力調査の結果
 協議会で出された主な意見
 研究を深めるための一冊
 成果と課題
 今後の取組とのかかわり
 研究主任のまとめ

読まれる研究紀要の作成を目指そう

読まれる研究紀要の作成に向けて

現在、多くの学校では研究紀要が発行されています。1年間の学校全体で取り組んだ研究内容とその成果をまとめ、研究の振り返りや次年度の研究の方向性を確認するのに活用できます。また、研究が蓄積されることはより大きな教育成果を生むために必要なものです。しかし、「研究紀要を読むのはたった二人である。研究主任と書いた本人である。」と言われ、読まれない研究紀要となっていることが指摘されています。読まれない研究紀要の問題点として、千葉大学の明石先生は次の8点を示されています。

- ① 問題提起が希薄であること
- ② 取り上げるテーマが絞り切れていないこと
- ③ テーマの新しさは何かははっきりしないこと
- ④ 研究仮説が設けられていないこと
- ⑤ 研究の成果を検証する方法を示していないこと
- ⑥ 事実を示してもなぜそうなったかという解釈がないこと
- ⑦ 文末がはっきりしていないこと（断定か推測か区別がつかない）
- ⑧ 一文が長すぎる



を挙げられています。この8点のうち①～⑥までは、研究の進め方とも関連しています。特に⑤と⑥については大きな課題です。「子供が前向きになった。」と主張しても、測定した方法を示さなければ誰も納得させることはできません。手続きをはっきりさせ「事実」を示す必要があります。教育では「事実」を示すだけでは不十分と言えます。なぜこのような事実になったかの解釈を示すことが新しい知見につながるのです。

参考に当教育センターでみられる論文の構成を示します。

（研究の要約）

主題設定の理由

研究の基本的な考え方

仮説の設定と検証の視点と方法

分析と考察

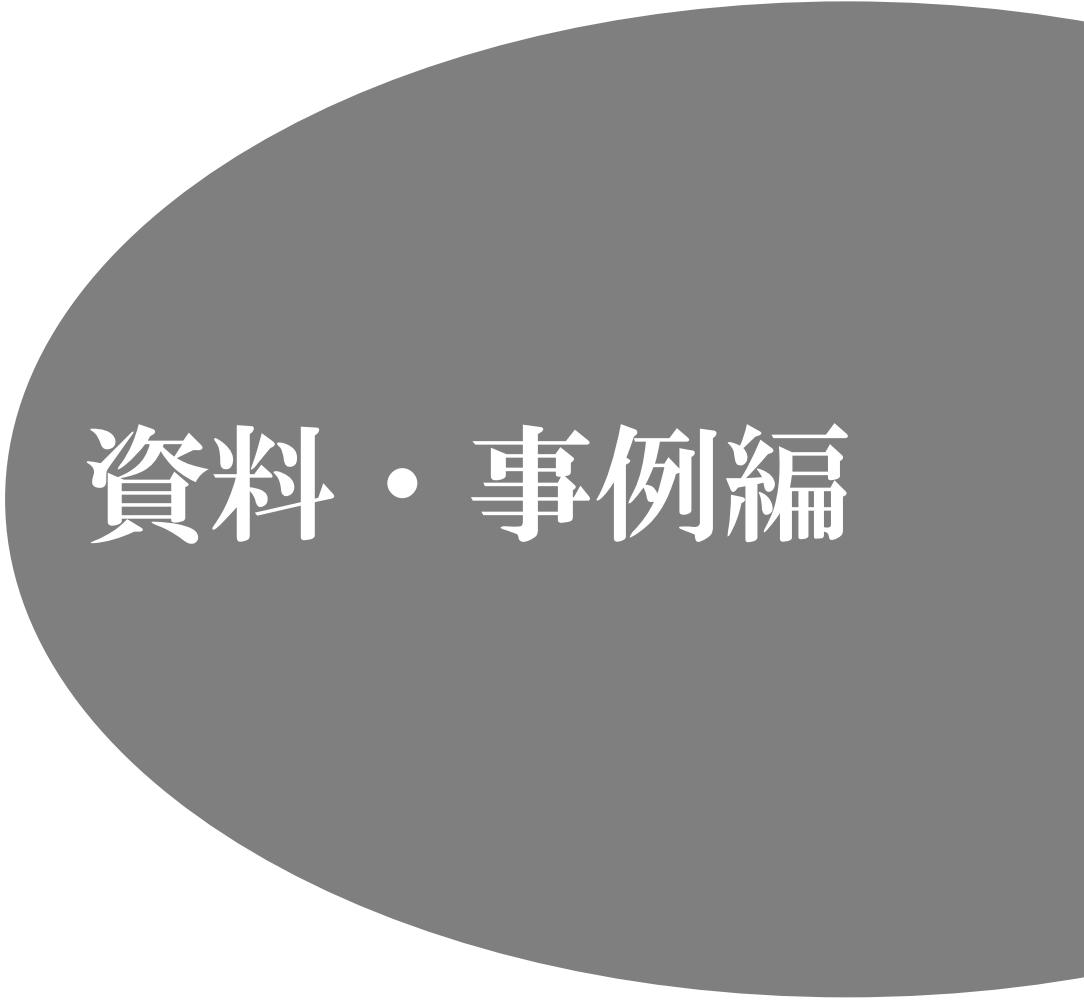
研究の成果と今後の課題

（引用文献、参考文献）

研究を論文形式にまとめると読みやすくなり、また批判が受けやすくなると同時に評価されやすくなります。

【参考文献】

国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要委員会「なぜ研究紀要を発刊するのか『読まれる研究紀要づくり』」国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 創刊号 2001年



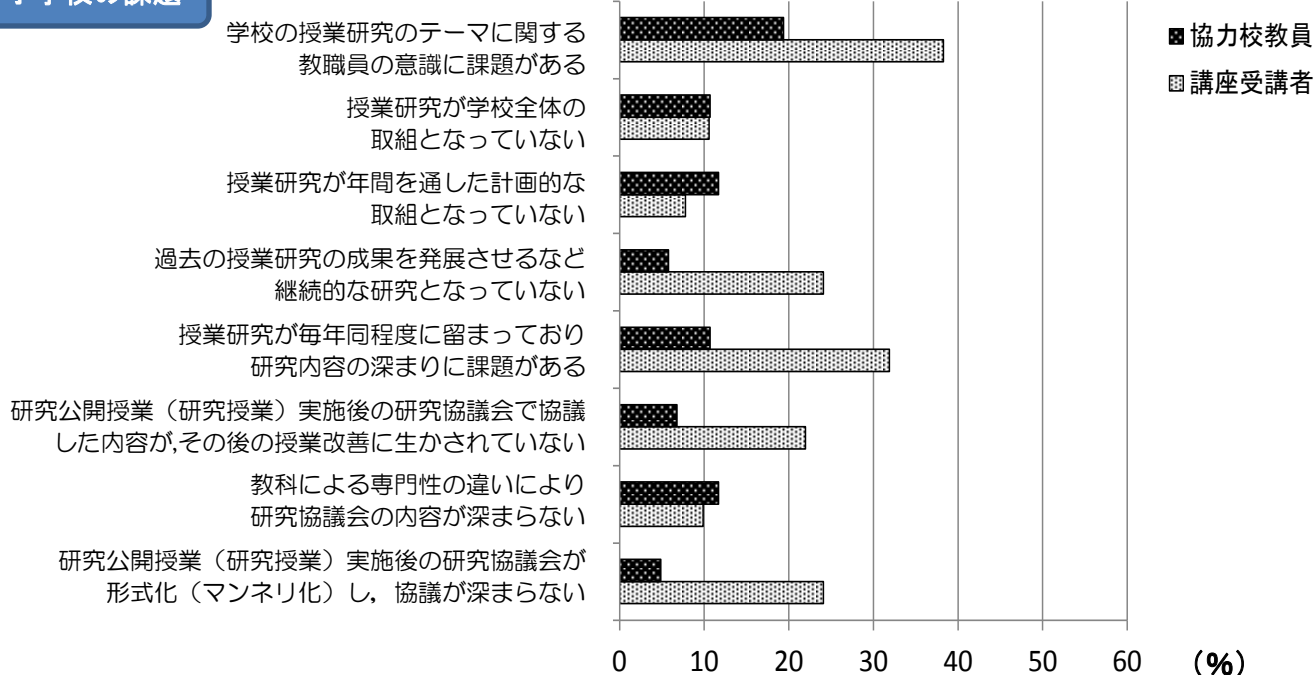
資料・事例編

授業研究の課題と克服のヒント

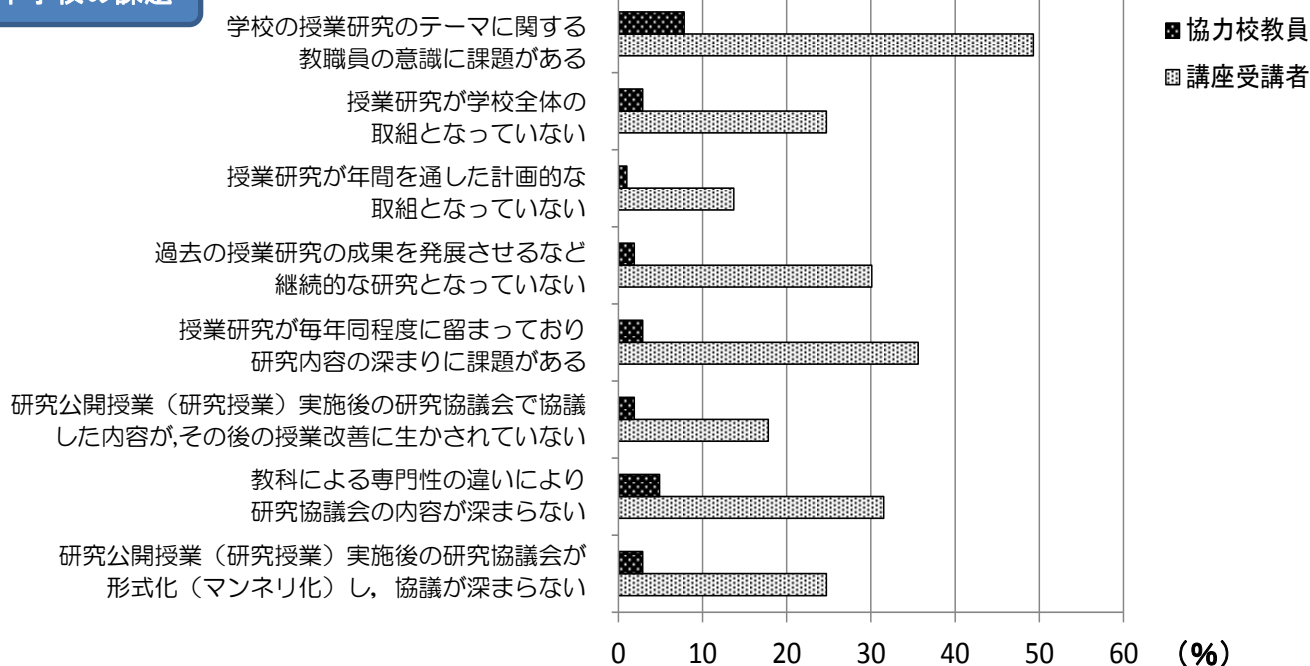
本ハンドブック作成に当たって、広島県の各学校が感じている「授業研究に関する課題」について、右ページに掲載している用紙を使いアンケート調査を行いました（対象：教育センターの講座受講者約300人）。また、県内で授業研究の取組を進め、「基礎・基本」定着状況調査・共通学力テストの結果から成果を上げている学校のうち、様々な規模の中から小学校6校、中学校3校、高等学校2校、合計11校に研究協力校として同様のアンケート調査や、授業研究の内容についての聴取、それに関わる資料提供にご協力いただきました。

所属校で行っている授業研究について「課題だと感じていること」を分析すると、グラフのように、講座受講者の先生方と、研究協力校の先生方では課題意識に差があることが分かりました。つまり、授業研究が進んでいる学校の先生方は、多くの学校の先生方が感じているような課題をあまり感じていない、ということです。そこで、研究協力校で行われている授業研究の取組が県内の各学校が感じている課題克服の参考になるのではないかと考え、このページで紹介していくことにしました。

小学校の課題



中学校の課題



授業研究に係るアンケートへの協力をお願い

県立教育センター教科教育部では、今年度「学校における授業研究の質的向上に関する研究」を行います。そこで、各校で行われている授業研究の現状と課題を把握し、その結果を分析するため、アンケートを実施します。つきましては、趣旨をご理解の上、次のアンケートに御回答いただきますようよろしくお願いします。

授業研究アンケート

- 所属校をお選びください。 (小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校)
○あてはまる職等をお選びください。 (校長 教頭 主幹教諭 指導教諭 教務主任 研究主任 教諭)
○所属校の現在の在籍児童生徒数を御記入ください。概数でも構いません。 () 人

問 1 授業研究実施に係る現状について、次の①～⑩のそれぞれの項目について、「よくあてはまる」場合は「4」、「ややあてはまる」場合は「3」、「あまりあてはまらない」場合は「2」、「あてはまらない」場合は「1」を () 内に書いてください。

- ① 授業研究を中心に据えた研究を計画的に進めている。…………… ()
- ② 授業研究のテーマに照らした具体的な手だてや授業モデル等を決めて取組を進めている。…………… ()
- ③ 授業研究を行う際には、授業研究のテーマに照らしたその授業での工夫改善点を、学習指導案の中に明確に示している。…………… ()
- ④ 先進校などの事例や先行研究を踏まえて研究を行っている。…………… ()
- ⑤ 大学教授等に研究指導者等を依頼し、取組の計画段階から継続的な指導を受けている。…………… ()
- ⑥ 研究公開授業(研究授業)実施前に事前検討会を実施し、授業観察の視点を共有化している。…… ()
- ⑦ 研究公開授業(研究授業)実施後の研究協議会は、研究協議の柱に沿って協議が行われている。… ()
- ⑧ 研究公開授業(研究授業)実施後の研究協議会では、研究授業の改善案の検討を行っている。…………… ()
- ⑨ 研究公開授業(研究授業)実施後の研究協議会の内容が、その後の取組に生かされている。…………… ()
- ⑩ 1年間の研究成果を次年度に継続するような工夫をしている。…………… ()

問 2 所属校で授業研究を進めるに当たってどのような課題がありますか。次の①～⑧のうちから課題に該当するものに全てについて、() 内に○印を付けてください。また、①～⑧以外に課題として考えられているものがあれば、その他の欄に書いてください。

- ① 学校の授業研究のテーマに関する教職員の意識に課題がある。…………… ()
- ② 授業研究が学校全体の取組となっていない。…………… ()
- ③ 授業研究が年間を通した計画的な取組となっていない。…………… ()
- ④ 過去の授業研究の成果を発展させるなど継続的な研究となっていない。…………… ()
- ⑤ 授業研究が毎年同程度に留まっており、研究内容の深まりに課題がある。…………… ()
- ⑥ 研究公開授業(研究授業)実施後の研究協議会で協議した内容が、その後の授業改善に生かされていない。…………… ()
- ⑦ 教科による専門性の違いにより研究協議会の内容が深まらない。…………… ()
- ⑧ 研究公開授業(研究授業)実施後の研究協議会が形式化(マンネリ化)し、協議が深まらない。…………… ()
- その他(自由に記述してください)

()

東広島市立西条小学校

力が付いたかを独自テストで評価

授業研究によって「児童に力が付いたかどうか」の検証は、主に本校独自に作成している「見取りテスト」で行います。平成20年度にこの取組を始めた当初は、全国学力・学習状況調査のB問題や問題集などを参考に作成しましたが、児童が思考したことを表現されたもので見取ることができるように毎年改善を重ねています。平成24年度からは研究主題にもリンクさせ、新たに思考スキルを入れた問題の作成にも取り組んでいます。この「見取りテスト」を6月と学年末の2回を実施し、結果はあらかじめ設定しておいた判断基準を基に、「評価プロジェクト」のメンバーが中心となって分析・考察します。また評価指標に基づいて、児童の到達度や年間での変容を見取ること、児童に力が付いたか検証を行っています。

また年度末には、教師アンケートで「今年度の研究の進め方で、難しかったこと、やりにくかったことはないか」について広く意見を出し合い、研究主題や研究の進め方自体についても振り返り、次年度改善していけるように工夫しています。やらされる研究ではなく、「みんなで作り上げていく研究にしたい」と考え、モチベーションが上がるような研究推進にすることを大切にしています。

何を、どのような材料やシステムで評価し、その評価結果をどうするのかについて、はっきりさせた取組により、「みんなで創造的にやろう」というポジティブな学校文化が根付いています。



東広島市立寺西小学校

課題を明確化して確実に評価

『活用型の授業作り』に向けて、まず、学力調査の分析をしよう！と、校長・教務主任・研究主任等をメンバーとした「学力向上プロジェクト」を立ち上げました。

まず全体研修で、「基礎・基本」定着状況調査及び全国学力・学習状況調査の調査問題を解きます。プロジェクトチームが作成したフォーマットで、どこが課題が見てすぐ分かるように、教科・設問の内容と通過率を示し、設問ごとにそれに対する「授業で行う対策」と「教育活動全般で行う対策」を協議していきます。昨年度の課題から、フォーマットを改善し、それぞれの設問について指導する重点学年と単元はどこかということについても明確にできるようにしました。この1枚のフォーマットで本校児童の課題がどこにあるのが明確になり、全体で共有することができています。

さらに、フォーマットで分析したことを基に単元末で行う活用問題の作成に生かし、児童に力が付いたかどうかを確実に評価していきます。評価の結果、課題として残った力を「どの学年のどの単元で指導しておく必要があるか」について再度フォーマット上で共有していることから、各学年の授業改善につなげていくこともできています。

評価を工夫することによって、研究授業を行った学年だけでなく他学年の授業改善にもつながっています。



東広島市立河内小学校

学習指導案と研究協議会を「想定した姿」でつなぐ

研究協議会の場で子供の姿の「想定」と「事実」のずれを分析することで、その研究授業を評価することができます。



小規模校のよさを生かし、日常的に児童の様子を交流することで、どのクラスにどんな児童がいるのかを共有し、全員で全児童を育てていく雰囲気があります。

授業研究では、事前に学習指導案を配付し、実際の流れ通りに模擬授業を行っています。学習指導案には、予想される児童の発言やノートの記述を児童の言葉や文章などで具体的に想定し、なるべくたくさん記述するようにしています。実際に児童の立場になって模擬授業を行ってみると、「他にこんな考えもある」「あの子はこう考えると思う」と、想定外のアイデアが出されることもしばしばです。授業者にとっては教材解釈が深まり、模擬授業の後に学習指導案を改善して実際の授業に臨むことで、児童の思考を理解しながら見取り、適切な支援を行うことができます。参観者にとっては、自分のこととして授業について考えることができ、自分の授業改善にも生かすことができます。このように、教員同士が学び合う雰囲気が、当たり前になっています。

廿日市市立宮園小学校

指導者からの継続指導と協議会の工夫

年間を通して、大学の先生に継続的に指導していただいています。先生には、教科の内容だけでなく協議会の進め方についても御指導いただき、授業記録を活用した新しい方法を取り入れることにしました。

まず、児童の発言一つ一つに番号をつけ、授業記録を詳細に取っておきます。それを基に、ねらいに迫る（または迫れない）ポイントとなった児童の発言を探り、発言番号を付箋に書いていきます。そして、「どの場面のどんな教師の働きかけが、その児童の姿につながったのか」について、学習指導案の流れを拡大した模造紙に付箋を貼りながら、その場面での様子を発表し協議していきます。具体的な児童の発言に着目して協議することで、どの段階で児童がつまづいたのか、どんな手立てが必要だったのかについて、具体的に考えていくことができます。

また、今年度からの新たな取組についても、協議で出されたアイデアを基に工夫改善し、全員で共通理解を図りながら、研究を進めていくことができます。

大学の先生などを招いて継続的な指導を受けることは、授業研究を次年度へつなげていくためのポイントの一つです。研究協議会のもち方を含めて、年間の授業研究自体がどうだったかを、指導者に評価してもらうこともできます。



三原市立南小学校

「改善レポート」「改善指導案」が次への橋渡し

「C」が「A」にながりにくいという課題を克服する一つの工夫が示されています。色々な役をみんなが経験することで、取組もスムーズに進んでいきそうです。



「研究授業の成果は、改善指導案を全員で作り上げた時である」という考え方に立って、効率的・実効的な研究協議会を行っています。授業の成果はあえて取り上げず、課題を出し合い、改善策をまとめ、最後に模造紙1枚へ授業再設計プランをまとめていきます。この取組を、できるだけ短時間で行うよう時間配分等にも気を配っています。

小グループで課題を出し合ったり改善策を考えたりする際には、全員が付箋紙にアイデアを書きます。また、その際のグループリーダーや全体を通してコメントを言う役は輪番制とし、全員が経験できるように工夫したので、みんな自分の考えを明確にもって表現しています。

授業者は協議会で出された改善案に自分の改善案を加えてまとめ、協議会直後に「改善レポート」と「改善指導案」を作成します。すぐに文章化することで、研究授業から学んだことや次に生かしていくことなどが整理され、授業改善につながっていきます。また、レポートや改善指導案は全員で共有し蓄積していきます。

尾道市立栗原小学校

プレテスト・ポストテストによる評価

実態把握と評価計画が確実に行われ、さらに焦点を絞ったテストによって検証されるという、実証的な研究が進んでいます。



平成24年度は国語科と社会科を中心に研究を行いました。全員が国語部と社会科部のどちらかの部会に所属し、それぞれの部会の中にさらに「授業班」と「評価・検証班」を置いて役割分担しながら進めました。

まず、児童に付けたい力を明確にするところから始めました。「評価・検証班」を中心に、国語科・社会科について児童アンケートを実施し意識調査をするとともに、プレテストを作成・実施して実態把握をしていきました。それらを基に、「授業班」を中心に発問の工夫やグルーブトークの工夫等を考えて、研究授業を行っていました。

児童に付けたい力が付いたかどうかについては「評価・検証班」が作成したポストテストを使って検証していきます。プレテストと同じテストなので、児童がどのように変容したかを確実に見取ることができました。また、その見取りから、どのように授業を改善していくか考えることもできています。

廿日市市立佐伯中学校

徹底した「実態把握」から計画を立案

実態把握の重要性をしっかりと認識して取り組んでいます。そこから導き出した課題だからこそ、どんなめあてがいいのか、どう指導してどう評価したらいいのかが明確になっているのです。



「基礎・基本」定着状況調査について、平成21年から継続的に、テスト結果や質問紙調査の結果を蓄積しています。また、学区の小学校の協力を得て、新入生徒が小学校在籍時にどのような実態であったかを、第5学年の時の基礎・基本定着状況調査結果を提供していただくことで把握し、経年変化を分析することで実態把握に努めています。そのような実態把握を基にして、指導の重点項目を考えたり、評価の計画を立案したりしています。

研究組織としては、全員が「拡大国語部会」「拡大数学部会」「拡大英語部会」に所属し、その部会を中心に研究授業を行ったり学習指導案の検討を行ったりしています。事後協議会では、めあて・指導・評価につながりがあったか、適切であったかについて討議し、参加者一人一人が改善案を述べるようにしています。このことで「自分がどのように授業を見ているか」を再認識でき、やりっぱなしの研究授業にならないような工夫をしています。

熊野町立熊野東中学校

「共有化」で小中連携を推進

熊野東中学校区の小学校2校と小中連携教育に取り組み始めました。小中合同の取組を共有化するために、中学校の教務主任が中心となり研究体制を整えていきました。まず、研究推進委員会を立ち上げ、3校共通の研究主題の設定や月1回の合同研修会の計画を行いました。四つ（国語、算数・数学、理科、外国語活動・英語）の教科部会では、研究主題をベースにして、各種学力調査の結果から各教科ごとに課題を分析し、「指導改善のポイント」を学習指導案に明記するようにしました。授業後の協議もそのポイントについて行います。研修後には部ごとの記録を集約した「学力向上研修だより」を配布し、所属する部以外の取組内容も全教職員に周知できるようにしました。公開研究会の学習指導案は、各校で検討したものを、3校全てに配布して検討し、返却されたものをさらに改善することができるよう工夫しました。

会を重ねるごとに、小中の教職員が混ざり合って意見交流するのが当たり前になってきました。さらに、評価問題の作成にも合同で取り組んだことで、小中の教職員がお互いに学習内容や指導法について理解し、「校種の壁」を越え、お互いのよさを学び合う雰囲気もできてきました。このことが、同じ中学校区の子供たちの力を伸ばしていくことにつながっていくと考えています。

課題の共有化や情報の共有化が、学区全体の授業研究をポジティブな雰囲気に行っています。評価問題を合同で作成することで評価の目的を共有化できます。



庄原市立高野中学校

計画と評価をつなぐ「共通実践」

授業研究を進めるにあたって、「学習のめあてと対応した振り返りを行う」「グループ・ペアでの学習活動を通して生徒の思考をつなげ深める」など、授業の中で5項目の「共通実践」を徹底して行うという計画を明確にしました。

研究授業前に事前研修会として必ず模擬授業を実施し、「共通実践」5項目をチェックします。そして、研究授業後の研究協議会では、この項目に沿った評価シートを使ったり、模造紙大に拡大した学習指導案の本時案部分に、気付きを書いた付箋紙を直接貼って協議したりするなどして、評価や分析を行っています。

また、項目に沿った生徒アンケートを年間で3回実施し、「共通実践」によって子どもの意識がどのように変容したのかを、1年間のスパンでも評価できるようにしています。さらに、この意識調査の結果を研究授業の学習指導案の「生徒観」に書き込むことで、評価したことが次の授業の計画に生きるよう、「つながる授業研」をめざしています。



「こういうことに取り組もう」と計画したことについて、それがどうだったかをシンプルに見取っていく評価の方法の一つが示されています。次の課題を見いだしやすくなっています。

広島県立御調高等学校

「目指す授業像」を共有し評価の視点を明確に

「生徒の知的好奇心を揺さぶっている」「共感的人間関係を基盤とした一体感のある授業である」「講義形式だけでなく指導の中身に応じて適宜言語活動を取り入れている」等、14項目で構成された「目指す授業像」を、4月に全教員で共有します。このことにより授業改善で目指す方向性が具体的に示され、授業を観察する際の視点が定まり、研究授業後の研究協議会ではこの点に沿って協議し参加者が具体的な改善策まで出します。

4月以降は計画に沿って取組を進めますが、計画の時点であらかじめ評価計画を組み込んでいます。評価のための情報は、生徒による授業アンケート、定期考査や共通学力テストの結果などで、いつ行うかを明確にしています。3月には取組の成果や課題をまとめ、新たに「改訂版・目指す生徒像」を作成していくように計画が示されており、1年間を通して取り組んだことが次年度へ生かされるように工夫しています。

「授業づくりは、生徒を学校経営計画に示している『育てたい生徒像』に近付けていくための手段である。」という認識、つまり「何のために授業研究をし、よりよい授業づくりに励んでいるのか」という目的を教員が認識・共有し、日々の実践を行っています。

目指す方向に向けて、教員のベクトルが揃っています。評価を機能させることや目的を共有化することの大切さが分かります。



教科主任会を機能させて取組の共有化を進める

授業改善に向けて、計画されたすべての公開研究授業の学習指導案を事前に教科主任会で検討し、よりよい実践となるよう取り組みました。検討の際は教科の枠を越えて活発な意見が出され、特に授業づくりの基盤である「めあてと振り返り」を授業に位置付けることを確認し、学習指導案を修正した後、授業を実施しました。

どの教科も、教科として学校全体の研究主題に沿った研究テーマを掲げてはいるものの、これまで授業者のみが学習指導案の作成に悩んでいるという状況が見られました。学習指導案を教科主任会に提出し検討することで教科会での検討が深まるとともに、教科の研究テーマに対する理解が深まりました。

公開研究授業の事前の取組を充実させることにより、個々に考える課題が共有化され、今後の授業改善のために「何を」「どのように」指導する必要があるのかという、取組の重点項目を導き出すことにつながっていききました。

授業改善の取組が組織的・継続的に行われていくよう、教科主任会が中心となって学校全体と各教科の取組を有機的に結びつけています。



本ハンドブックは、広島県立教育センターにおける共同研究「学校における授業研究の質的向上に関する研究」（平成25年度）の成果物として作成しました。